



別冊

これからの時代に求められる国語力について
- 審議経過の概要 参考資料 -

平成15年 1月29日

文化審議会国語分科会

目 次

- 1 「これからの時代に求められる国語力について」委員アンケート..... 1
- 2 子供たちに読んでもらいたい本のリストの構想について..... 53

「これからの時代に求められる国語力について」 委員アンケート

文化審議会国語分科会（以下「分科会」という。）では、平成14年7月に、各委員に対し、「これからの時代に求められる国語力について」のアンケートを実施した。

このアンケートは、次の項目を目安として掲げながら、それぞれの委員が考える内容を自由に記述する形式で実施した。

日本人として必要な国語力の目安

- (1) 読む力
- (2) 書く力
- (3) 聞く力
- (4) 話す力
- (5) 総合的な力

国語力を身に付けるための対策

- (1) 子供に対して
- (2) 大人に対して
- その他

25名の委員のうち、19名の委員からの提出があった。

アンケートの内容については、その後の分科会での審議の材料とされたが、今回、審議経過の概要を取りまとめ、公表するに当たって、情報を公開し、国民の理解に資するという観点から、提出されたアンケートについても参考資料として公表することにした。

なお、もともと分科会内での審議に供するものとして記述していたため、アンケートについては、各委員ごとに記入者名を伏せた形で取りまとめている。

また、今回、参考資料として公表するに当たって、アンケート記入者自身によって若干の修正が加えられた部分もある。

【A 委員】

日本人として必要な国語力の目安

- (1) 読む力
一般の新聞や雑誌・書籍などを正確に読解しうること
- (2) 書く力
書くべき内容を正確に他者に伝えられるよう、一語ごとの用法やニュアンスを考えながら表記できること
- (3) 聞く力
伝達されることを過不足なく理解できること
- (4) 話す力
伝えたいことを正確に、また聞き手に不快感を与えない配慮をもって話せること
- (5) 総合的な力
自分で使う言語に対して積極的な意識をもって臨むこと

国語力を身に付けるための対策

- (1) 子供に対して
読書の習慣をより多く身につけさせること
- (2) 大人に対して
特に思いつくことはありません

その他

< 表題 > 表外漢字字体表のその後

第22期国語審議会では、答申の一つとして表外漢字字体表を作成しました。その趣旨が現在JISの方面などいくつかの分野で前向きに検討されていると仄聞しておりますが、答申以後2年近い時間が経った今、表外字をめぐる現状がどのようになっているのか、また答申の趣旨を社会により大きく反映させるためにはどのような施策が必要かについて、分科会でも御検討頂ければ幸いです。

【B 委員】

日本人として必要な国語力の目安

(1) 読む力

文章を読む。

各種の文章を論理的，想像的に読むこと。

各種の文章の構成，テーマを把握し，要約すること。

単語の概念を把握し，慣用句を認知，理解すること。

敬語を認知，理解すること。

(2) 書く力

文章を書く。

自分の感情，考え，意見を具体化したり，抽象化したりして，テーマ，構成を整え，論理的に各種の文章を書くこと。

和語，漢語，外来語の特質を理解して使い，慣用句を適切に使用すること。

社会的な関係を考え，適切な敬語を使用すること。

(3) 聞く力

話を聞く。

話し手の気持ち，考え，意見を論理的，想像的に聞くこと。

話し手の話を要約しつつ，自分の考えをまとめること。

話し手の話の各種の形態に対応した聞き方をすること。

話し手との社会的関係を考えた聞く態度をとること。

(4) 話す力

話をする。

話す相手を考えた発音，発声を行うこと。

自分の感情，考え，意見を具体化し，構成，テーマ，形態を整え，論理的に話すこと。

和語，漢語，外来語の特質を理解して使い，慣用句を適切に使用すること。

話す相手との社会的関係を考え，適切な敬語を使用すること。

(5) 総合的な力

日本語を活性化する。

日本語を，世界の各種言語の中の日本語として意識し，他言語との交流を行い，日本語の特質についての理解を深めること。

日本語による文化遺産を吸収し，日本語文化発展の担い手としての基本的な力を身に付けること。

日本語の生き生きとした使い手となるために，精神的，身体的鍛錬につとめること。

国語力を身に付けるための対策

(1) 子供に対して

英語とのバイリンガル化を基軸に，他言語・文化との交流を深め，日本語・文化の特質を理解させ，日本語を活性化させる意識を持たせる。

日本語における和語，漢語，外来語の発達の歴史的な過程を理解させる。
日本語の文字（漢字・平仮名・片仮名）の成立，使用の過程を理解させる。
漢字の構造を学び，漢字に対する主体的学習意欲を育てる。
外来語の漢語化（日本語化）の過程を学び，外来語への正しい姿勢を育てる。
日本語による文化遺産としての名作，古典を体系的に読む読書時間を設け，名文の朗読，暗唱をすすめ，豊かな言語体験を得させる。
テレビ，ラジオ，新聞などのメディアは，読書の推進，適切な言葉遣いの促進など，子供たちに良い言語環境を提供する。
言語を受容（読む，聞く），表現（書く，話す）する主体としての精神的な力，身体的な力を強める指導を行う。

（２）大人に対して

日常的に辞書を活用し，絶えず語彙力の維持，強化に努める。
手引き書などを基準にして，正しい敬語の使用や言葉遣いを心がける。
文章の書き方などの手引き書をもとに文章を書く。小説，詩，短歌，俳句などを創作する機会を持つ。
評論，文学など，優れた作品を読む読書の時間をつくり，読書の内容について，家庭，地域，職場などで話し合う。
会話が楽しく行われるルールをつくり，家族，友人，知人などとの対話を積極的に持つ。

その他

<表題> これからの国語力 言語としての活性化

国語，すなわち日本語は，急激な情報化，国際化の進展のなかで，さまざまな問題点を抱えている。この現状をふまえて，これからの国語力を考える視点を，日本語の活性化という方向におきたい。

日本語の源流は，音声言語としての和語であり，文字を持つ言語ではなかった。中国文化との交流のなかで，漢語が流入し，和語の中に漢語が取り入れられるとともに，和語の漢語による表記化，漢字の使用，漢字をもとにした平仮名，片仮名の作成，使用が行われ，日本語が形成され，発展してきた。また，明治維新後の西洋文化との交流時の外来語も，日本人によって漢語化され，日本語となってきた。これは，日本語活性化の歴史的流れである。

日本語の基本的構造（音声，文法）は，和語であるが，和語には抽象的概念を表現する言語は生まれず，漢語によって行われた。しかし，明治維新後の文化交流時に，西洋文化がもち，日本語には存在しなかった新しい概念は，西洋言語の漢語化によっても日本語となってきた。これも，日本語が持っている活性力の現れである。

日本語による文化遺産は，「源氏物語」に見るように巨大なものである。日本人は，このような日本語による文化遺産としての名作，古典の読書を通して，自己の中に日本語文化を蓄積し，精神的な基盤を形成している。

急激な情報化，国際化の進展で，日本語文化も，世界の他の言語文化との交流が日常化してきた。なかでも，英語とのバイリンガル化が加速している。こうした状況下で日本語の持つ構造的特性が改めて意識され，新しい解明も行われている。これも，

日本語活性化の一つである。

日本語にとって漢字は、特別の意味を持っている。漢字を学び、使用することを受動的にばかりとらえるのではなく、漢字の構造的理解を通して、人間の文化的創造活動の産物としての漢字文化をとらえることが重要である。そこから、漢字文化、日本語文化への主体的視点を確立することができる。

日本語による名作や古典を読み、朗読、暗唱することによって、日本語を受容し、表現する力（技能）を強める。対象としたい作品を例示すると、

ア 「源氏物語」(紫式部)

イ 「徒然草」(兼好)

ウ 「奥の細道」(松尾芭蕉)

エ 「こころ」「草枕」(夏目漱石)

オ 「城の崎にて」(志賀直哉)

カ 「黒い雨」(井伏鱒二)

キ 「坂の上の雲」(司馬遼太郎)

などがある。

【C 委員】

日本人として必要な国語力の目安

(1) 読む力

辞典を引く習慣を身につけ、難しい言葉については、こまめに辞書を引きながら文章を読むことができる。

黙読して内容を読みとることができる。

作者や著者の言いたいこと(主題, 要点)を読みとることができる。それに対して自分の考えをもつことができる。

(2) 書く力

3分間に200字程度の作文を書くことができる。

1965文字の教育漢字の読み書きができる。

目的に応じた内容の文章(手紙, 報告文, 日記など)の書き方がわかる。

(3) 聞く力

話し手の意図を捉えて聞くことができる。

「感想や意見」と「根拠」を聞きわけることができる。

不明な点や異なる意見について問いただすことができる。

自分の考えと比べながら聞くことができる。

(4) 話す力

目的や相手, 場面, 状況等を捉えて, 相手に伝わるよう適切に話すことができる。

スピーチ(独話)の力をつけることはもちろん, 対話(1対1, 1対多)の力もつける。まずは, きちんと返事ができる子を育てる。

(5) 総合的な力

相手の気持ちを考えながら話を正しく聞くことができる。

自分の思いや考えを相手に正しく伝えることができる。新しい指導要領では, この「伝え合う力」が重要視されている。

自分の課題を解決したり, 自分の考えを作っていくために資料を集め, 選択し, 活用する総合的な力(資料活用能力)をもつことが大切。

国語力を身に付けるための対策

(1) 子供に対して

読書活動をすすめる。

正しく美しい言語環境を整える。

例えば, 「単語の羅列で用を済ましてしまうこと」, 「若者言葉の流行」, 「ら抜き言葉」などの言葉の乱れに配慮。

時と場に応じた言葉遣いができる。(尊敬語, 謙譲語を使い分けることができる。)

新聞記事に親しませる場を作る。また読むだけでなく, 記事に対して自分の考えをまとめ作文にする時間を作る(NIE)。

視覚(映像)に訴えることが盛んになっているが, 読み聞かせの時間を作り, 聴きとる力を育てることも大切。

(2) 大人に対して

フランス人は、花嫁道具の一つとして子どもに正しいフランス語を身につけさせるという話を聞いたことがある。これは、フランス人がいかに文化を大切にしているかの証であろう。日本でも親は自分の責任として、子どもに正しい日本語を身につけさせる自覚をもつことが大切。

大人が子供の話をゆっくり聞いてあげる。また、一緒に読書をしてあげれば、子供が自然に本好きになることも期待でき、情緒が安定し、豊かな言語活動ができる子に育っていくのではないか。

その他

<表題> 手で文字を書くことの大切さ

1 情報機器の発達と日本語能力の低下

第5回文化審議会国語分科会で配布された「平成13年度国語に関する世論調査」では、携帯電話や電子メールなどの普及による通信手段の多様化で、「漢字力が落ちた。」と感じている人が4割に上ること、また、「手で字を書くことが面倒である。」と感じる人も3割を超えていることが報告されている。これらの傾向に対して、平成14年6月20日付日本経済新聞朝刊では、「時には親指一本で漢字も打てる、簡便さの副作用ともいえそうだ。」と論評している。

最近出版されている日本語に関する興味深い書籍の一つに、柴田武著「覚えておきたい美しい日本語」がある。その第1章「パソコンは教えてくれない日本語の大間違い」では、

当着順に受け付けます。

女抱けの部屋も用意いたします。

という二つの例を用いながら、「変換ミス of 意外な日本語」を論じている。そして、「機械は、日本語の使い方までは教えてくれない。」と警鐘を鳴らしている。

以上をはじめ、情報機器の発達とその利用の急速な拡大を日本語能力の低下と結びつける評論は結構多い。そして大抵の場合、その要因として上述のように、字を手で書かなくなることや変換ミス of 問題などが論じられている。

2 一方的な判断は困る

しかし、上記のようにワープロが誤った漢字変換を行う可能性があり、日本語の正しい使い方を教えてくれないからといって、機械は役立たないと短絡的に結びつけるのは性急に過ぎるし、柴田先生もそのような趣旨で書かれているのではないと考える。

「平成13年度国語に関する世論調査」における上記と関連した漢字に関する質問項目は、回答者が「漢字を正確に書く力が衰えた」かどうかを問うたものである。つまり、この問いは正確に書く力は衰えたかもしれないが、ワープロを使って「正しく変換できる能力」が衰えたことを示しているわけではない。また、同世論調査での興味深い結果として、「漢字を多く使うようになった」という回答者が4.3%ながらいることにも注目したい。最近の高度なワープロソフトウェアでは辞書機能がついており、候補として提示される漢字から正しい漢字を選択することを同じワープロの画面で補助してくれる。4.3%の回答者は、候補となる漢字が次々と提供されることから、より多くの漢字を使うことが可能になったのであろう。

このようなことを考慮すると、携帯電話やワープロの普及のみが「漢字力が落ちた原

困」とは一概に言えないのではないかと考える。

3 手で文字を書くことは大事なのは

ただし、先の論議から、機械は十全であり、もはや漢字を苦勞して何十回も書いてまで覚える必要はないということにはならないと考える。つまり、日本文化としての漢字を手で書くという作業を軽視してはならないと言いたい。正しい書き順に従いながら、「冠」「偏」「旁」などの配置、さらには各部への力の入れ具合を考えながら、手を動かして何度も書いて覚えるのと、視覚から入る情報だけで漢字をパターン認識によって覚えるのでは、私には正確なことは分からないが、脳の働きが多分に違うと思われる。例えば、「写経」において文字を書くという手作業は、何かの精神作用に関係しているような気がしてならない。こうした違いの影響はすぐには現れないだろうが、漢字文化の継承という流れのなかでは、将来的に大きな欠落部分を生むように思われてしかたない。

手間を要する行為が文化継承にとって重要であることの例としては、「先割れスプーン」を挙げることができよう。学校給食で使い勝手のみを追求する余り「先割れスプーン」を使うことが一時なされたが、この便利さのみを追求した食器では、食文化の豊かさが守られないことは明白である。和食の文化を継承するには、やはり、使用するには習熟を要するとはいえ箸が必要なのである。

日本語文化の継承を筆記具に関して考えると、本来ならば毛筆で文字を書くことが最適なであろう。それを鉛筆、万年筆やボールペンなどに置き換えるところまで譲歩できるとしても、今後ワープロ等だけを筆記具として用い、「手で文字を書くこと」をこれらの機械にすべて譲ってしまうことは、何か取り返しのつかないことになりそうだという危機感を覚える。

4 結局のところ

パソコンを介したインターネットの利用により、個人の世界に向けた容易な情報発信や世界に分散している貴重なデジタルコンテンツの収集が可能になったことは、世界史上の三大発明に類する程の大きな出来事と言える。また、それによる相互の文化理解への貢献も計り知れないものがある。その素晴らしい文明の利器を日本語能力の向上にいかにか用立てていくかは、深く考えれば考える程難しい問題である。人間の習性として「楽な方へ向かう傾向」があることを考えると、文化を守るためには手で文字を書くことなど、結局のところ、「敢えて手間のかかる行為を継続すること」の大切さがあることも確かである。パソコンをはじめとする情報機器の機能を活用しながらも、手書き文字に代表される文化の継承をまっとうできる文化意識を国民に広く育成できる方策が求められているのではないだろうか。

【D委員】

日本人として必要な国語力の目安

(1) 読む力

日常生活に困らない程度の文字が読めるところから、新聞の論説文が読んで理解できる、文学作品を読んで一通り理解できるなど。古典をそのまま読む力までは、どうでしょうか？素人意見で恐縮ですが、難しいように思います。また、これらに必要な基本的な語彙力に関する具体的な量や水準については、(2)から(4)の問いも含めてご専門の先生方にご意見を頂戴したく存じます。

もう一つ。一度身につけた読む力は、生涯にわたってその人の生活で十分活用され続けることを望みます。「読み続ける力」「読むことを生活に活用する力」を養うことが、重要だと思います。子供の頃に身につけたいことは、上質の文章に親しむことに加えて、自分で調べてみる、説明文を読んで目標にたどりつくなどの体験を繰り返し獲得することです。

(2) 書く力

論旨を適切に組み立てて必要なことが書ける力。常用漢字、書き言葉の習得。生活に必要な文書の形式の習得など。

しかし、子供時代には、漢字をきちんと書くという時間と、形式にとらわれずとにかく文をたくさん書くという時間の両方が必要だと思います。書く力を身につけることが最も長い時間が必要と思いますが、子供時代は特に書き続ける動機を支えることが先決です。

(3) 聞く力

話の要旨を的確に把握して、足りないところや確認すべきことなどの情報を整理できる力。電話での応対など。加えて、相手の話をじっくりと聞き入り、気持ちを理解する力。

子供たちにまず必要なことは、最後まで相手の話をきちんと聞ける力。これができないと、何がわからないかをわからない、というコミュニケーション不可能な状態になってしまいます。

(4) 話す力

その場に即した内容を適切な表現を使って話せること。「内容」と「表現」両方適切に話せるようになるというのは、大人になっても毎日学習です。作法としてという、批判があるかもしれませんが、表現を学ぶ時間と、思ったことを自由に話す時間とを分け、子供時代に、きちんとした話し方をする場面というのをあらためて教える必要があるように思います。

(5) 総合的な力

知識としての国語力を主体的に使いこなす力。複数の意見を交換し、沢山の文脈の中から要旨をまとめ上げ、新しいものを生み出すことができる。多くの人とやりとりし、社会生活を送ることができる力。

現実生活の中で起こる生身の体験はすべて情動を伴う体験であり、子供が直接に感じるその体験と子供の使う言葉の一致具合について自覚できるかどうかは、言葉を主体的に使える大人になるために欠かせません。うまく表現できなくても、自己の感じるものと違う、と感じられることが言葉を主体的に使う存在として重要です。これは、人と触

れあい、やりとりを重ねる中で、学び取るものかもしれません。

国語力を身に付けるための対策

(1) 子供に対して

子供に必要な国語力は、基礎的なことを身につけるための時間と、それらの知識を総合的に生かす訓練のための時間の両方が必要です。国語の授業に含まれる内容の幅を考えると、授業のねらいが子供に伝わりにくい、という問題が生じるのもうなずけます。国語と文学を分ける意見がありましたが、授業のねらいが明確になると、子供にも授業の構えができると思います。

さらに、発言力を育てるなど、コミュニケーションが前提となる教育には、日本人がしつけの過程で、子供に恥ずかしさを感じる力を早期から身につけさせる習慣が作用して、子供に葛藤を起こさせる可能性があります。教室で実際に起こる教授過程の問題について、このような視点でもっと慎重な検討を積み重ねていく必要があります。

(2) 大人に対して

自身の国語力強化、維持について関心を持ってもらうための長期的な啓発活動。

例えば、ビジネス、日常マナーとしての言葉遣いの生涯教育。子供への言葉かけや国語力を高めるための親教育など。

その他

<表題> コミュニケーション（伝え合い）の中にある言葉と文化

これまでの議論と重複するところもありますが、発言する機会がとぎれとぎれでしたので、一通りまとめて意見を述べます。

1 コミュニケーション（伝え合い）の中にある言葉と文化

日本語という言葉そのものの持つ本来の美しさや豊かさが、日本の文化を守ることであると共に、その言葉が私たち一人一人の自己の発達に大きく関与するという機能的側面について取り上げることが重要であろうと考えます。

自己は、人と人との関係の中に育ち、またその関わりの中に文化が伝達され、これが自己の形成に重要な要素の一つになることは、臨床心理学においても広く認められるところです。

2 象徴的コミュニケーションを支える情動コミュニケーション

人のコミュニケーションは、二重構造になっており、象徴的コミュニケーションの最たるものが言語のやり取りですが、コミュニケーションの質を支配するのは、言葉そのものではなく、その発し方、動作など力動的なものから読み取れる情動的なやり取りです。

適切なときに適切な言葉で考えることができるというのは、実はこのような二重構造のコミュニケーションをくりかえし持つ中で育っていくことだと考えます。

3 学校教育における双方向的な教育プラン

国語教育が、広い意味で子供の自己の基礎から育てるものであるとすると、上記のような二つのコミュニケーション機能を維持するカリキュラムの工夫が必要となるでしょう。

読み、書き、いずれも、文字でのやり取り、言葉でのやり取り、身振り手振りを入れたやり取り、というように「やり取り」の中で身につけさせることが大切です。それがひいては、「心の中の自分」とやり取りする力になっていくものと思われま

す。

古典を頭から読ませる、という提案も強くあったように思います。そのときに、生きた古典芸能についても、多く触れる機会がバランスよくもたれることを望みます。古典に限らず、生きた人に直接触れる芝居や、踊りなど、テレビ慣れした子供たちの素直な感動は、案外大きいものです。体育館はおかげさまでどの学校にもあるのですし、格式ばったものはなかなか難しくても、大学生の劇団であるとか、とにかく企画を作って必ず月一回何かやる。親子も地域の人にも来てもらう、ということ奨励するとよいと思います。

生の体験を共有して、それについて授業で話す、シンプルですが、生きた言葉が沢山出てくる機会が増えます。

(読書教育について) 国語力を高めようと思って読書させるのは、大人の意図であって、子供が本を読む動機ではありません。国語力がつくからと、受験勉強のために本を読むのだとすれば、当然大人になって本は読まなくなるでしょう。およそは、良い本に感動体験が随伴するわけですから、本が好きになる子供もいるかもしれませんが、今のところ感動を味わうという部分は、その子供任せになっており、どう感じているかを人と共有する体験につなげるカリキュラムが強化されるべきでしょう。ブックスタートのような、地域で実践が増えている乳幼児期の読み聞かせとの連続的な読書教育を再考する必要があると思われま

す。

この他、いくつか学校での教育について考えてみました。

図書室を書庫化しない。つまり、読書のちょっとした案内役になるような人を配置することに賛成です。本のことをよくわかっている方がいいと思いますが、資格のあるなしより、教員の係りの方あるいは、非常勤の方と、地域のボランティアを募集するなどがあると思います。図書館のサロンの部分を拡大するといったイメージでしょうか。一定期間の実践があったところで必ずかわり方のステップアップを求める動きがあると思います。いろいろな様子をして図書室に足を運ぶ子供のニーズを如何に読み取って対応するか、尽きることのない問題があるからです。

読書感想文のほかに、日記など、毎日ノートに作文を書き、教師が簡単なコメントをつけて返す。この時間が教師に保証されるよう、専門講師による科目担当の時間を増やす。いいものはどんどん、学内、学外へ公表していく。

課題図書を個人で読むほかに、クラス単位、担任主導で一年間じっくり取り組む良書を選び、全員が読んで、共有する時間を作る。

その積み重ねの中で、良いものを脚本化し、クラスでイメージを膨らませて劇発表にする。(小学校6年生くらいからの目標です)。書かれていることを舞

台装置に視覚化すること、音響で表現してみるなど、言葉を他のモードに変換する作業です。出来上がったものをいかにうまく演じるか以前に、いかに舞台に表現したかというところを大事にします。主題歌を作っても良いですね。

いずれも、そこで生じる子供たちの心の動きを軸にして、本読み体験の周りに沢山の思い出が作られることを意図しています。

4 地域の教育力を一層促進する

例えば、教育力の潜在的可能性を強く感じるのは、全国に組織されている青年会議所の存在です。彼らは、その地域に深く根付いたアイデンティティを持ち、なおかつ青少年の教育を熱心なボランティア精神で実践できるだけの生活のゆとりと教育水準を持った優秀な方々が多いのです。そして学校教育とは少し離れた自由な立場から、場合によっては全国規模の活動をいち早く展開していける組織を持っているように思います。

他にもいろいろあると思いますが、歴史があること、男性が多く、子育て関連のことはとかく母親中心になりやすいところを補正する意味合いも出てくることなどが、魅力です。

学校教育というと、中央から全国に向けて発信する方向が比較的強い印象を受けますが、学校が中心になって地域の人と交流を図ること以上に、青年会の地域力というのは強いと思います。もう行われているところもありますが、彼らの活動に学校が積極的に協同して、地域の交流を活発化し、方言やきちんとした会話を、親や教師以外の大人から学ぶ機会を育てることも大切だと思います。

5 日本語に誇りを持つ

これは、急速に進むグローバル化の中で生じる一つの統合に抗するような、反作用的現象に含まれる視点かもしれませんが、輸入文化から輸出文化にかえるような努力、その発信が外側から自国の再評価として戻ってくる、という動きを、もっと大きな予算を使って作り出すことを望みます。

6 日本語を母語とする多様な人々を視野に入れる

日常生活に最低限必要な日本語、日本語として大切にしたい良質な言葉、これについて皆で共有することも重要かと思います。この分科会で検討され、「求められる」とされる高度な国語力を身に付けることが困難な子供たちも多くいます。日本語以外の言語を母語とする方々も今後はどんどん増えるでしょう。仮に、いや、ちょうだい、の二つがわかればコミュニケーションは成立し、ありがとう、さようなら、ごめんなさい、こんにちは、があれば、人の生活はぐっと豊かになります。

簡単で短い言葉の中にある意味を味わい、あらためて共有しようという営みが、日本で暮らす全ての人を包含して日本語を大切にすることにつながることを願います。

【E 委員】

日本人として必要な国語力の目安

(1) 読む力

特に、次の三つの文章の種類に即応した読解力を養いたい。

事実、現象や事柄を客観的に取り上げた説明的な文章（説明、記録、報告、報道など）につき、分析的に事項・項目別に整理しながら、言葉を的確、正確に一義的に読み取ることができるようにする（また、そのような使い方、記述の仕方を身につける）、また様々な事実、現象や事柄についての知識・理解（認識）を形成する

未知の事実、現象や事柄につき、根拠や理由を挙げて論理的に関係を推測し考え仮説を立てた文章、また解決すべき問題につき証拠や理由を挙げて論理的に考えを推し進め、自分の立場から主張・意見を述べている文章に接し、根拠・理由と仮説あるいは主張・意見という、論理的思考を学ぶ。また、その根拠・理由・証拠の挙げ方、文章の構成・展開の仕方（帰納法、演繹法）を学ぶ

人間の心や行動、また社会の出来事を取り上げ、イメージを繰り広げている文学的な文章に接し、比喩的な、多義的、含意的な文章表現を読み味わうことができるようにする（また、そのような主情的、感性的な言葉の使い方を心得る）

(2) 書く力

特に、次の三つの文章の種類について表現できるようにしたい

書式を整えた文書や伝統的な形式にのっとり手紙や通信の文章（これら、実用的な文章につき形式をわきまえる）

事実や事柄などにつき、客観的に項目などを整理し、的確に伝わるように、分かりやすく読みやすくなるように配慮して表した文章（説明的な文章）

ある立場からの主張・意見、または未知のことについての仮説につき、それを客観的に支える根拠や理由を挙げ、帰納法または演繹法により論理的に表す文章（説明・論理的な文章）

（なお、随筆、感想などの感性的主情的な文章も加えることができるが、これを並べると上記の三つの文章の種類に対する陶冶が疎かになるので、敢えて出さない）

(3) 聞く力

特に中心的な聴解力について

相手の取り上げている話題や議論に即して、メモを取りながら話の順序を追うことができること、そして説明的な話なら取り上げられている事実や事柄を分類し整理することができること、説明・論理的な話なら話し手の立場、根拠や理由と主張・意見といったように論理的な思考の進め方に応じて整理し聞きとることができること。加えて、聞き取ったことに即し、自分のものの見方、感じ方に生かすことができること

(4) 話す力

特に中心的な話表力について

話すべき内容を整理し、説明的な話の場合には、順序を整え、中心となる伝えるべき事実や事柄を順序立てて的確に表し伝えることができること、説明・論理的な話の場合には、帰納法か演繹法かを選び、中核となる自分の主張・意見を明確に短くまとめて表すことができ、かつそれを支える根拠や理由を添え、的確に伝えるこ

とができること

技能的には、落ち着いた穏やかな態度（表情・姿勢・視線など）、相手との関係を配慮した洗練された言葉遣い、明瞭な発音、場にふさわしい音量、適切な速度、大事などところの強調、間など、工夫することができること

（５）総合的な力

音声言語にせよ文字言語にせよ、言葉を表すことにあつては、その言葉を表すその人間ひとの人間性そのものを表すこととなる。よく「心と言葉」という言い方をするが、その心の陶冶、日常生活における人間関係を配慮したしつけが必要である。現代は、民主主義を標榜し、「基本的人権」を相互に尊重し合うという、自立と共生の生き方に目覚めなければならない。言葉に内在する、このような人間性にも目を向けなければならない。換言すれば、基本的な人権の尊重に立つ、倫理性（社会性）のある言葉の使い手を育てることである。

国語力を身に付けるための対策

（１）子供に対して

挨拶ができる

まず謙虚に他人の話に耳を傾けて聞くことができる

親や学校の先生が薦める本を読破する。読書好きになる。良書を選択できる判断力を身につける

不明な言葉については、積極的に辞書を引いたり百科事典を引いたりする

家族、友達、そして先生や近所の人達と接する場合、親疎に応じて、待遇表現を使うことができる

正確な認識に基づく説明力、的確な根拠や理由のある論理的な思考力を養う

漢字の学習をコツコツ続け、的確な語句の使い方に習熟し、語彙を豊かにする

（２）大人に対して

子供向けの、絵本や児童書、中学生向き、高校生向きの本など、発達段階に応じて与える

挨拶のしつけ、待遇表現のしつけなど、具体的な場に応じて行う

生活上などで不適切なことがあった場合、叱るのではなく、理由を述べて静かに説く

学校の先生や身近な人、近隣の人などの批判は絶対にしない（子供に人間不信の根を作らないようにする）

テレビ番組の適否につき、理由を挙げて判断し選択する（野放しにしない）

その他

<表題> 言語力とは、主体的に言語情報を処理・操作する能力

私は、現代を生きる人間の言語力（国語力）とは、総論的に言えば、自分の課題を解決するために主体的に言語情報を処理し操作する能力である、という考え方を持っている。

いささか単純な描き方となるが、現代では一国内で国民の生活を賄い営むことができるという時代・社会ではなく、世界の各国と様々な問題を通し互いに連携し、それぞれ

出来るところで貢献し合うという国際化の時代・社会であり、それゆえに一国内のインフラストラクチャーは世界の各国と結ばれて成り立つ情報化の時代・社会でもある、と言われる。

このような国際化・情報化の時代であるということを配慮すれば、日本人が使い続けてきた日本語も、単に国内的に使用される言語という捉え方を越え、国際化・情報化の時代・社会の中での、諸言語の一つとして意識することにもなる。このことは、日本人以外にも日本語を使う人々がいるということとともに、日本語自体がそれぞれの国や民族のそれぞれの言語とともに使われているということであり、それは例えば翻訳の手段を通して使われ合い理解され合うということでもある。国内外で、日本語を日常生活における主たる言語として使用する者は、この日本語を使い生きる以外にない。日本語で得られる限りの情報により知り、考え、判断することとなる。

一つの考え方として、日本語で生活している者が、この国際化・情報化の時代・社会を生き抜くには、日本語をもってこの時代・社会に通用する言葉の使い方を身に付けることが必要だ、ということになる。そこで日本語も世界の諸言語の一つであるのだから、日本語という言語をもって、世界の中に通用するような言語力のあるものとして、この言語を身に付けなければならない、ということになる。

私はそこで、現代という国際化・情報化の時代・社会に生きる人間の言語力とは、生きるに当たって自分の課題を解決するために必要となる言語情報を収集し取捨選択し処理し操作する能力である、と考えた。この言語情報の処理・操作とは、換言すれば、情報を受信（つまり、聞く・読む）し、それを知り分かる（「認識」する）ことに始まり、そのことにおいて既知の情報（「知識・理解」）として蓄積することになり、そのことにおいて不明なこと、不可解なこと、疑問なこと等があればそれについてどうすべきか、どうあるべきかなど様々に関係を考える（論理的に「思考」する）、あるいはイメージを浮かべ直観的にまた比喩的に自由に関係を感じ思う（主観的感覚的に「想像」する）などして解決を図る、つまり判断したり決断したりする、そのような流れを経て、自分としての考えや思いがまとまったところで、それを一つの言語情報として送信する（つまり、話す・書く）ということになる。このように見てくると、いわゆる「聞く・読む」とは、何（つまり言語情報）を受信する行為であり、いわゆる「話す・書く」とは何（つまり言語情報）を送信する行為である、とすることができよう。

言語情報を受信し、送信するという行為の間に、実は言語を処理・操作するという主体の「認識」の形成、「思考」や「想像」の活動があるということになる。更に言えば、言語情報を受信する際にも自分にとってそれが必要な情報であるのかどうかという取捨選択するという「発想」という働きを据えておかなければならない。また、科学的客観的な論理的な「思考」をめぐらす際にもひらめきつまり「発想」が内在するし、主観的直観的な自由な「想像」をめぐらす際にもひらめき思いつきつまり「発想」が内在する。言語情報を受信（聞く・読む）した主体の頭脳内の情報の処理・操作とは、「発想」「認識」「思考」「想像」といった言語の働きである、と考えられる。このような言語の働きを頭脳内で適宜にめぐらして、自分としての「言語情報」を生み出している、と考えられる。これを「創造」と名づけることも出来るであろう。

私には、「聞く力」「読む力」という受信にかかわる面での言語力、「話す力」「書く力」という送信にかかわる面での言語力という取り上げ方から言語力を分析しその構造を解明することも一方法ではあるとは思いますが、「何」を聞き取るのか、「何」を読み取るのかという受信の際の「言語情報」自体についての解明、また「どのように」聞くの

か(聞き方),「どのように」読むのか(読み方),という受信の際の「言語情報」を処理する方法というふうにしたほうが分かりやすいように思う。「何」それは,普通に言えば「内容」であるが,ここでは受信する「言語情報」の質とでも言うべきものである。その言語情報が,発信者の「認識」したことの情報なのか,「思考」したことを表した情報なのか,「想像」したことの情報なのかということである。受信に際しては,そうした情報の質により,どのように処理し操作するかの方法が別となる。(このことは,別紙「読む力」「話す力」の項に略述した。)

受信した様々の言語情報に関し,新たな関係を「発想」し発見し関係づけて,自分独自の「認識」情報を作り出したり「思考」情報を手繰り出したり「想像」情報を編み出したりする。これこそが,最も大事な主体的な言語情報の処理・操作である。このようにして自分の中に形成され創り出された言語情報が外すなわち他人に向けて発信される。その発信を,音声言語では「話す」と言い,文字言語では「書く」と言っている。

「何」を話すのか,「何」を書くのかという際の「何」とは,この自分の中の「言語情報」なのである。そして,「どのように」発信するのかという発信の方法が「話し方」「書き方」ということになる。つまり,表現方法である。換言すれば,他に向けての言語情報の伝達の方法である。

「認識」情報は説明的な文章(説明,記録,報告,報道などの類),「思考」情報は説明・論理的な文章(学説,論文,主張・意見の類),「想像」情報は文学的な文章(物語,小説,随筆,戯曲,詩・短歌・俳句など)として表されるものである。

なお,国際化・情報化の時代にあっては,「国語」というよりも「日本語」という呼称であるほうが据わりがよいと考える。しかし,歴史的伝統的に使い続けている「国語」という呼称を排除するという考えは直ちにはとらないという考えも尊重する。ここでは,広く見る立場から「国語力」を「言語力」という用語で記述した。

【F 委員】

日本人として必要な国語力の目安

(1) 読む力

黙読，文章を読んで内容を理解できること。

感じ取り，想像を広げることができること。

感動できる感性を持つこと。

内容を判断し，共感したり，批判したりできること。（特にマスコミ報道に関して）

音読，正しい発声，発音ができること。

意味内容に，呼吸を合わせて読む習慣を身につける。

(2) 書く力

事実を正確に記述する力。

物事を正確に描写する力。

思っていることを，過不足なく言葉にすることができること。

論理的に構成できること。

手紙，葉書などの基本的な書き方と，気持ちの伝え方。

漢字，語彙をできるだけ多く身につける。

(3) 聞く力

話の内容を理解できること。

言外の思いも忖度できること。

話し手に共感できる感性を持つこと。

聞いた話から多くのことを想像する力。

(4) 話す力

自分の心にあることを素直に言葉にできること。

できごとを順序立てて話すことができること。

ものごとを描写して語るすることができること。

人前で意見を述べることができること。

論理的に話を組み立てることができること。

他者に配慮ができること。（相手を傷つけないなど）

(5) 総合的な力

自分の意見を持ち，他者の心に届く言葉で語るができること。

異なる価値観の人々の意見を受けとめ，接点を見いだすための対話ができること。

会話を楽しむ能力。

国語力を身に付けるための対策

(子供と大人に分けられないので一緒に書きます)

これからの日本が，より平和で民主的で，誰もがその人なりの幸せな人生を全うするこ

とのできる社会にするために、我々の「言葉」はどうあるべきか、私なりに考えてみた。

言葉の機能は大きく分ければ、自分の思考を深める機能と、他者との関係を築く機能の二つに分けられるように思う。

まず、「思考を深める」道具としての言葉について考える。情報が溢れる今の時代、ただ情報を無批判に受け入れていると「自分の思考」が育たない。他人の言葉を受け売りであたかも自分の意見のように本人自身も思いこんで語っている人がいかに多いことか。「自分の思考」に基づく「自分の言葉」を一人一人が持つことが、よりよい社会を築く上で不可欠だ。そのためには知識教養が大切なことは言うまでもないが、もう一つ、自分自身の「体験を言語化できる」能力と、それを社会的に「発言していく意識」が必要だと思う。

卑近な例を挙げれば、働く女性が育児をするのが、今の日本社会ではいかに大変か、その体験を語ることで、世の中を変え、次の世代の女性を生きやすくするように。こうした能力や意識を育てるには、やはり幼いときからの積み重ねが重要で、学校や地域社会で意識的な取り組みが必要だと思う。その具体的な方法についての案は後に述べる。

「他者との関係」を築く道具としての言葉には、まず自分の思いや考えを他人に伝える側面と、他者の言葉を聞いて受けとめるという側面がある。情報化、国際化が更に進むこれからの時代、日本人の得意技「以心伝心」が、なかなか通用しにくくなるのは想像に難くない。誰もが、これからは論理的な言葉をと叫ぶのも当然だが、では論理的に正しくさえあれば、その人の言葉に誰もが説得されるだろうか。そこに何らかの「思い」がこもっていないかぎり、その言葉は人の心に届かない。その意味で、これからの時代に本当に求められているのは「情理あいまった言葉」、「感情的にならず、論理的で、しかも人の心に届く言葉」で発言する能力だと思う。そのためにも、若いうちから自分の中に、借り物でない、自分自身の体験から学んだ「自分の言葉」を育てていくことが大切だ。

権威ある人の観念的な建前をありがたがるより、志ある人が「自分の言葉」を「率直」に語ることを尊重する社会へと、日本社会全体が成熟していく必要もある。教養や思い遣りに裏付けされた「率直さ」こそ、言葉に力をもたらすものだから。マスコミでも、番組の出演者を選ぶときなど、そんな視点を大事にすべきである。

携帯電話やカラオケなどの隆盛が象徴するように、今の日本は「自分から発信したい人」で溢れている。みんな自分の話を聞いて欲しいのだ。その話をじっくりと聞く人は、ごく稀にしかいない。悩みを誰かにただ聴いてもらうだけで、人の心は癒される側面があるというのに。家族の形が多様化し、核家族や一人暮らしの増えている今、カウンセラーなどの専門家以外に、日常生活の中で、他人の話をじっくりと聞いて受けとめる人の存在が是非とも必要だ。従来は家族の中で行っていたはずの「聞く」作業を、社会的に代替するシステムができないものか、家庭の持つ「癒し」の機能を社会全体で受け持つことができないかと考える。このとき必要なのが、相手の言葉をキチンと理解し、受けとめ、相手と心を通わせることのできる力だ。これからの日本には、そんな「聞く力」を持つ人材が重要になると思う。

その他

<表題> なし

具体的な提案としては、既に会議でも発言しているが、改めて整理する。

1 日常生活において、駅や電車の中、デパートなど、公共の場所でのアナウンスが気になって仕方ない。喉を押しつぶしたような声、鼻に掛けたフガフガした声など、あまりにもヒドイ発声。うねるような極端に不自然なイントネーション。その上文法的に間違っただけの言い回し。良い声で上手に話して欲しいというのではない。人間が肉体を通して、日本語の音の原則にのっとって喋るとき、自ずから発声の方法やイントネーションも決まってくる。自然な、発声、イントネーションでアナウンスして欲しいと思うのだ。文法的な誤りなど、言語道断。駅や電車など、通学する児童生徒たちも毎日耳にする言葉に、こんなに無神経でいいものか。こうした言葉に慣らされることによって、「言葉に対する感性」の鈍い国民ができあがっていくのを恐れる。ある規模以上の公共の場所でのアナウンスには、せめて「誤りのない日本語」を義務づけたらどうだろう。

2 平成13年12月に成立した「芸術文化振興基本法」では、地方公共団体に、区域の特性に応じた芸術文化振興のための施策を策定、実施する責務を課していると聞く。この「芸術文化」の中の「言葉」に焦点を絞って、この法律を活用することを国語分科会の委員として提案したい。

地域ごとに、人の集まりやすい場所に、「言葉のインストラクター」とも言える核になる人材を何人か配置する。演劇、朗読、読み聞かせ、読書会、言葉にまつわる勉強会など様々な活動を展開する。この時大切なのが子供からお年寄りまで、あらゆる年齢層が共に一つのことを成し遂げること。そこに擬似家族のような関係が生まれ、かつて大家族の中で子どもたちが大人同士の多様な「関係」を目撃し、そこで様々な言葉や振る舞い方を身につけていったのと同じような効果が期待できるのではないかと。同時に、他者の言葉を聞いたり、聞いてもらったりする、癒しの関係も成立しうる。すでに一部ではこうした取り組みをしている所もあると思うが、全国の各地域ごとに行うことに意味がある。

こうしたことを、みんなが楽しめる形で進める「インストラクター」には、相当な力量が要る。大学などで、地域での「言葉文化」振興を意識した人材育成が必要だろう。一方で、言葉にまつわるあらゆる職業の定年退職者などの活用も考えられる。こうした場を通して、異なる価値観の人々と意見をすりあわせる対話の能力を養うことができるはずだ。そして何よりも、上質な会話が人生の大きな快楽であることにみんなが気づけば、日本人の言葉は豊かになり、よりよい社会も実現するのではないだろうか。

【G委員】

日本人として必要な国語力の目安

(1)(2) 読む力・書く力

詰め込みふうになっても義務教育の段階では、言葉の読み方、意味を徹底的に会得させること。新聞が読めるくらいのレベルを目標とし、たとえば、私のこの回答の中の「義務」「徹底」「会得」「総花」「英知」くらいは読めて意味がわかることが必要です。書くほうも同様で基礎を充実させ、達意の手紙が書けるくらいのレベルを習得させたいと思います。

(3)(4) 聞く力・話す力

聞いて話すためのカリキュラムを特別に設けて、この方面の関心を募らせ、基礎的なノウハウを教えることは必要ですが、(1)(2)(5)との関わりの中で自然に培われるものも多いと思います。

(5) 総合的な力

とにかく読書の勧めです。国語力はすべてここから始まり、この力がついていれば、あとは本人が必要なときに積みあげることができるでしょう。

国語力を身に付けるための対策

(1) 子供に対して

総花的な方法より重点的に“読書の勧め”を提案します。学校図書館、司書教諭の充実、そして時間表の中に週一回くらい読書専門の授業を設けるのもよいでしょう。スーパーバイザー的な司書教諭が読書の楽しさ、効果的な本の利用法、読書の効果などを年齢にあわせて広く指導することが理想です。

(2) 大人に対して

これも読書を勧めることが肝要と思いますが、読書習慣を持たない人には、多分効果が乏しいでしょう。だからこそ上記の若いときの指導が必要なわけですね。せいぜいカルチャー・センターなど成人教育の機会を増やすことくらいでしょうか。みんなが国語辞典を一冊、身近におくような呼びかけも少しは効果があるかもしれません。

その他

<表題> 楽しい読書の勧め

若い人を対象に、本気で、楽しい読書の実現を考えるのが、肝要だと思います。方法はいろいろある、と思います。英知を結集して有効なアイデアを実践したらいいかでしょうか。一見、かたよった、部分的な方法のように見えて、審議会としては答申しにくい方向なのかもしれませんが、総花的なことより（それは今までに十分に尽くされたのではないのでしょうか）私はこの一点を訴えるほうがインパクトがあるのではないかと考えております。

【H委員】

日本人として必要な国語力の目安

(1) 読む力

「読む力」は、日本文化を継承し、日本人としてのアイデンティティーの基礎を培う文学的素養，言語感覚，感性 他人の感情を理解できる力 論理的分析力，思考力の基礎となる言語操作能力，に大別されるのではないかと考える。それぞれが必要である。

については、「読む力」というより「読んで獲得した力」というべきものである。日本文化に誇りを持ち、グローバル社会に生きる日本人としての基礎となる素養，感性の獲得を目標としたい。この場合，語彙力，文法的な力は目標というより手段である。小学校，中学校，高校卒業までに身に付けるべき文学的素養，読まねばならない古典的作品とは何かについては，意見の分かれるところだろう。意見集約のための論議を起こす必要がある。小学校段階ではとくに，必要な古典の素読，暗唱などを重視し，身体的，感覚的にも，日本文化の真髄をつかませる必要がある。

は，他者に感情移入できる力と言い換えてもよい。と密接に関連する力である。国立教育政策研究所の調査で、「ごんぎつね」の気持ちを理解できない小学生が目立ったが，他人に対する想像力の希薄さを示している。具体的目標は提示しにくいし，しない方がよい。

については，新聞が想定している段階を記す。読売新聞社が毎週掲載している「子供のページ」は小学校5年生を，「NIE特集」は中学校2年生程度を読者として想定し，編集している。他の新聞もほぼ同様と思われる。それぞれの段階の特集ページを，無理なく，習慣付けして読みこなせる力が欲しい。高校生ともなれば，新聞の各面に一応，目を通せるだけの力をつけていることが望ましい。

(2) 書く力

中学卒業までに身近なテーマについて，高校卒業までにやや抽象的なテーマについて，「私はこう考える」と，他人を説得できる論理的な文章を書ける力が欲しい。単なる感想的な作文ではなく，思考，分析，判断を伴う小論文が書ける力が求められる。

そのためには，一つの課題について深く考える作業と，起承転結，文章の着地の仕方などの文章テクニックの学習が必要である。基本的な型を身に付け，それをテコに思考していくプロセスが，まず重要ではないかと考える。高校，大学入試で小論文が出題されつつあるが，望ましい傾向である。とくに大学入試では，受験生集めの安易な入試方法としてではなく，総合的な学力を判断する手法としてさらなる工夫が必要ではないか。自分の考えをきちんと書き表すのに必要な語彙力も，古典の学習の中で身に付けたい。名作の模倣を重視すべきである。

(3)(4) 聞く力・話す力

表裏一体をなすものである。「書く力」に示される思考，分析，判断を順序立てて説明し，他人の意見を容れて修正する力であって欲しい。中学校段階では身近なテーマ，高校段階では抽象的なテーマについて聞き，話せる力が必要である。中高校生のディスカッションの試みは盛んだが，内容において物足りないことが多いのは，ただ子供が話

し合うことで教師が自己満足し、分析力、判断力の練磨が背景にないためである。

正しい日本語表現、敬語なども身に付けさせたい。そのためには、聞き方、話し方の意識的なトレーニングも不可欠と考える。

(5) 総合的な力

イギリスのシェイクスピア、フランスのラシーヌなど、それぞれの国民の基礎教養となる古典がある。日本では最近、基礎教養としての古典学習が、疎かにされてきた印象を持つ。古典学習の基盤の上に、思考、判断の道具としての言語操作能力を位置付けるべきである。この二つは重なり合わないこともある。それぞれへの対応が求められる。日本人にとっての古典とは何か、についての議論をまず起こすべきである。

国語力を身に付けるための対策

(1) 子供に対して

子供の自発性にまかせて読書活動が盛んになるなら、それに越したことはないが、現実にはそうではない。10年ほど前には漫画、そのほか以前には文庫本を読む中高校生の風景があったと思うが、今はそうした情景にもあまりお目にかからない。本に対して親和性のある家庭、そうでない家庭への二極分化が目立つ。家庭で本に親しむ環境の乏しい子には、学校などでの取り組みが求められる。公教育での読書推進がなければ、家庭での読書体験が望めない子供は、切り捨てられることになる。

子供の遊びに対し、冒険遊び場や遊びのきっかけを作る指導員が求められている。友達との触れ合いを進めるため、ピア・サポートなどの工夫もなされている。自発性尊重だけでは何も始まらない。

幅広く、段階を追った読書リストを作成し、家庭、学校に参考として提示するのも、一つの方法である。この場合、「子供の自発性を損ねる」「冊数主義」との反対意見が必ず出る。これに対するには、読書リストを子供の興味・関心に沿ってジャンル分けし、子供に「次にこれを読もう」と意欲を起こさせる工夫が必要である。民間教育機関の「公文」が、10数段階における推薦図書リストを作成し、効果をあげているとされる。ヒントとしてよい。

東京・世田谷の小学校で、「みんなで読書5000冊」、中学校で、朝読書で年間8冊読破を、学校図書館の貸し出しを2倍になどの運動が広がっている。独自の推薦図書リストの作成、全学年読書週間の設定なども進んでいる。こうした試みを広く知らしめることも望まれる。イギリスで、誕生日に本をプレゼントする運動など、独自の読書推進の動きが活発だという。その具体的な姿を知らしめたい。

まず親が、自分が感銘を受けた本について子供に語らねばならない。新聞などとタイアップして、親や教師が子供たちに何を読んで欲しいと思っているのか、その「ベスト30」を探ることなどを、世論調査によって行うことも方法として考えられる。

新聞を活用して欲しい。NIE（教育に新聞を）運動が、日本新聞協会主導で進められている。自分の関心のあるテーマの記事を切り抜き、壁新聞を作るレベルから、例えばアフガン問題を1年間かけて追跡し、子供が自分の意見を書き、話せるところにまで持っていく試みなど、様々な取り組みがある。読み、書き、話すのレベルアップには、

様々な読書媒体の活用が欠かせない。

ディベートを、学校教育に取り入れて欲しい。これは、「聞く力」「話す力」の目安で、中学校段階では身近なテーマ、高校段階では抽象的なテーマについて聞き、話せる力が必要としたことに照応する。いかにして相手をやりこめるかという技術的な競争に走っては意味がないが、すべてのことには是、否とするべき二面性があり、どちらを選択するかはそれらを総合的に判断して決めねばならないという、判断の基本を学ばせることにつながる。

大学入試はもちろん高校入試でも、小論文を取り入れるなど書く力を見る試験を進めるべきである。それによって、これまで塾や予備校まかせのところもあった論理的文章力の養成に学校が取り組むことが期待できる。

文章構成力、表現力などはある程度、客観化、指標化できるものとする。文部科学省が行う全国学力試験に、問題文章を示しそれを基にする小論文テストを課してはどうか。採点にできるだけ主観が入り込まないように、評価ポイントなどを明示すると、文章作成に関する基本的な共通項が学校などで認識され、全体のレベルアップにつながるのではないか。

(2) 大人に対して

強いて言えば、学校を、大人も含めた「学びの共同体」とする観点から、子供の読書活動に大人の参画を求め、巻き込んでいくことしかないのではないか。東京・世田谷区の小学校での「みんなで読書5000冊」運動には、親が読んだ本も含まれる。

教師の読書量が決定的な役割を果たすが、これは教師文化の問題であり、どうしようもない。図書館の充実が重要である。図書館を想定した地方交付税が、目的通り使われているかどうかの調査と公表が、各自治体の問題意識のバロメーターを示すものとして必要かもしれない。

その他

<表題> 言っておきたいこと

現段階では、次の社説にかなり集約されています。

[社説] 総合的学習 幅広く深い読書に活用したい(2002.6.7 東京朝刊 3頁 全993字)
見過ごされがちだが、とても大切なことがある。古典や名著の読書活動も、その一つだ。日本語への関心が高まっている。文部科学省の中教審、文化審が、国語力の育成を訴え、古典などの読書を重視するよう求める答申を発表した。日本の古典の奥深さ、面白さを実感させる本がベストセラーにもなっている。

グローバル化、情報化が進んだことによる、アイデンティティの揺らぎが、背景に見て取れる。時代を超え、読み継がれてきた作品に触れ、自身の文化的な基盤を確かめたいとの思いがあるのだろう。異文化理解にも不可欠だ。

日本の古典を読みこなし、自分のものとする機会と時間を、子ども時代から与えたい。だが、国語の授業がその役割を果たしているとは言い難い。国語の授業には「話す」「聞く」「書く」など様々な狙いがあり、「読む」にばかり時間は割けない。コミュニケーション能力の育成を重視し、文学作品の学習には力点を置かない傾向もある。

新学習指導要領の実施で総授業時間そのものが減った。加えて「総合的な学習の時間」の導入により、総授業時間に占める国語の比重は12～14歳平均で12%に過ぎなくなった。アメリカ、フランスなどでは母国語学習に総授業時間の17%を当て、読書も重視している。OECD（経済協力開発機構）の調査で、日本の高校生は「趣味としての読書をしない」比率が際立って高いことも明らかにされている。総合的な学習の時間を読書の習慣育成に当てることを、真剣に考えねばならないことを示している。

多くの小中学校で今、自然・社会体験や物作り活動などが、総合的な学習として行われている。かつての「知識の詰めこみ」への反省からだ。だが、ただ体験するだけで、子どもたちの学力伸長にどう結びついているのか、目的や効果があいまいなケースも少なくない。総合的な学習は、自ら学び、自ら考える力の育成を狙いとしていることを思い起こさねばならない。読書体験は、考える力の源泉となるものだ。

リズムのよい文語を声に出して読む、古典や名著の核心部分を話し合っ読解力を身につけるなど、体験的な要素を取り入れた学習も可能だ。夏目漱石や森鷗外の作品でも、総ルビ付きだと小学生でも読めるとの研究成果もある。総合的な学習に英会話を取り入れている小学校も多い。だが、まず自国の歴史や文化についての知識を深めることが肝要だ。それなくしては、正確な異文化理解も心もとなくなる。

【 I 委員 】

日本人として必要な国語力の目安

一般的には、国が義務教育として定めている中学校3年生までに身に付けるべき国語力（学習指導要領で示された内容）が日本人として最低限必要な国語力と考える。

（ 1 ）読む力

目的や意図に応じて広い範囲から適切な情報を集め、取捨選択したり、加工したりして効果的に活用する力

文章の論理の展開の仕方や説明や描写などの表現の仕方をとらえ、内容を的確に理解するとともに、自分の表現に役立てる力

文章を読んで書き手の思考や心情に迫り、人間、社会、自然に対する自分の感想や意見をもつ力

* 新聞の一般紙が読め、内容を理解するとともに、自分の意見をもつ。

* 中学校で出てくる古典（百人一首、芭蕉、蕪村等の俳句、竹取物語、平家物語、枕草子、徒然草、方丈記など）や初歩的な漢文が読めて理解できる。

（ 2 ）書く力

自分の立場を明確にして、相手や目的、場面などに応じ、伝えたいことを明確にして書く力

自然や社会、自然や文化などにかかわる様々な課題についての資料を収集し、その資料をもとに自分の考えを深め、論理の展開を工夫して、説得力のある文章を書く力
文章の内容が効果的に伝わるように文章構成を工夫して記述する力

報告や意見発表などのために簡潔で分かりやすい文章や資料などを作成する力

* 説明文や記録文、手紙や感想文、意見文など、一般的な文章について、その特質にそって書くことができる。

（ 3 ）（ 4 ）聞く力・話す力

話し手のものの見方や考え方をとらえるとともに、話の内容を的確に理解し、自分の考えを豊かにしたり深めたりする力

広い範囲から話題を集め、聞き手に分かりやすく整理して話す力

話の中心と付加的な部分、事実と意見との関係に注意し、話の構成や展開を考えて聞いたり話したりする力

話の内容や意図に応じた適切な語句の選択、文の効果的な使い方など説得力のある表現の仕方に注意して話したり聞き取ったりする力

相手の立場や考えを尊重し、話し合いの目的に沿って効果的に展開するよう話したり聞き分けたりする力

* インタビュー、ディベート、独話、対話、説明、パネルディスカッション等その特質に沿った聞き方、話し方ができる。

（ 5 ）総合的な力

時と場に応じ、敬語を適切に使う力

国語に対する関心を深め、国語を尊重する態度

正誤、適否、美醜など、言葉に対する感覚を豊かにすること

進んで表現したり読書したりして、生活を向上させようとする

国語力を身に付けるための対策

(1) 子供に対して

朝読書、読書指導等を通じて読書習慣を確立させる。

日々の国語学習において、めあてをはっきりもって学習させるとともに、国語の学習の仕方を身に付けさせる。

漢字練習、音読、朗読、視写など繰り返し学習し、国語の基礎・基本を確実に身につけさせる。

発達段階に沿って必読書（古典も含め）を設定し、どの学校の図書館にも配置する。

漢字検定など、国語力向上のための受験を奨励するとともに、高校受験などにその検定結果が生かされるようにする。

(2) 教師に対して

楽しい授業、分かる授業、力のつく授業が展開できるよう教師の国語指導力を向上させ、日々の国語授業を充実させる。

に向けた研修、研究活動を活発化する。

子供たちに学ぶ意欲を持たせるべく、新聞を学習に取り入れる、ディベートを行う、テレビ番組を作成するなど、多様でユニークな言語行動を組織し、充実した授業づくりを行う。

自らが子供たちに対する大きな言語環境の一つであることを意識し、言葉遣い、話し方、板書など正しく丁寧に美しくを心がける。

(3) 社会に対して

美しく豊かな日本語を広く普及するための言語環境づくりに官民一体となって取り組む体制を創り上げる（特に、テレビをはじめとする情報産業の俗悪番組、有害情報チェック、有益情報の提供等）

その他

<表題> 小学校における国語科教育の充実に向けて

1 国語指導法のシステム化を図ること

子供たちにとって国語の学習は、重要な学習であるとの認識はあるが、好きな学習ではないという結果が出ている。その要因は様々考えられようが、とりわけ、小学校においては、国語の指導がその指導者に特化する傾向が強く、十分に指導法がシステム化されていない。具体的には、1時間1時間の国語学習を通して、どういう国語の力がついたのか不明な授業、一見活気のある授業に見えて、その実、一部の子供たちだけが学習に参加している授業、活動はあるがそのねらいの不明確な授業など、国語科指導法が指導者に十分身につけていない場合がある。その結果、子供自身が、国語の学習を通してどのような言葉の力がついたのか自覚するところまでいかない。

教員養成、教員現職研修における国語指導法について一層の充実と国語教育研究の活性化を図る必要がある。

2 教科の再編成と国語指導の時間増

今回の学習指導要領の改訂において、完全学校週五日制の実施及び総合的な学習の時間導入は、各教科等の指導内容の厳選と指導時数の削減を余儀なくされたが、その結果、すべての教科等の指導時数を平均的に削減することになった。各教科それぞれ重要であることは理解できるが、国語力の低下が言われ、国語の力は、すべての知的活動の基盤であるとおおかたが認めているにもかかわらず、他教科と同様、国語の時数も一律に削減されてきたことは理解に苦しむところである。今期教育課程の改訂に理念や哲学が見られないといわれても仕方がない。

教育開発学校等で、総合的な学習の導入が教科の再編等を含めて検討され、その結果が今回の指導要領改訂だと考えられるが、十分な煮詰まりのないまま、総合的な学習の時間のみ導入されたように思われ、その学習の基盤をなす国語力の不足のまま、不完全な総合的な学習の時間の展開がなされているのが学校現場のおおかたの実情である。

今後検討されるべきは、小学校における基礎教科の国語、算数、体育を重視した教科の再編と、それぞれの時間数の増、とりわけ、国語の指導時数の大幅増である。このことは、国語の重要性を国民に改めて認識させる大きな手だてになるものと思われる。

3 国語教科書の検討

国語の教科書の在り方を改めて検討するべき時が来ているのではないか。読みの指導のための教材を中心としているとはいえ、話す、聞く、書く指導の教材、そして言葉や漢字等の指導も含め、総合的に編集されている現在の教科書で果たしてよいのか。すべての社の教科書に共通に採用されている教材の少なさ、(4年「ごんぎつね」1年「おおきなかぶ」のみ)、教材配列の無秩序、指導者の力量に負うところが多い音声言語教材、作文教材、漢字指導等見直すべき点が多い。

言語教科書、作文(表現)教科書、読みの教科書と分冊することも一方法である。

【 J 委員 】

日本人として必要な国語力の目安

(1) (2) (3) (4) (5) 読む力・書く力・聞く力・話す力・総合的な力

具体的な手がかりを、普通の人にとって身近な新聞の紙面で考えたい。

新聞には政治，経済，社会，国際などの各面のほか，文化人や専門家の寄稿，短歌・俳句，読者の投稿の欄がある。

大半の日本人は社会面やスポーツ面を読めるだろう。しかし，分析力や思考力を高めるには，少なくとも，「社説」を読みこなす力が不可欠だ。文化欄には時折，むずかしい原稿が載るが，大半の作品を読みこなせる力が望ましい。

新聞によっては，和歌や漢詩などを扱うコラムもある。現代・近代の詩歌は別にして，古典をとどこおりなく読める力まで求めるのは無理だ。古典については，読みこなすための初歩的な知識があればよい。

書く力としては，投稿欄に載せられる力がほしい。投稿欄は，政治や社会を論じる場合と身辺を語る場合があるが，いずれの力も必要だ。

国語力を身に付けるための対策

(1) 子供に対して

家庭での教育は必要だが，それは掛け声やスローガンに終わりかねない。社会として，一番有効な対策をとれるのは学校の場合だ。なかでも，教科書が重要だ。子ども一人一人が興味を持ち，読んでみようと思うように教科書がつくられているか，点検する必要がある。

その他

< 表題 > 日本語は豊かな人生のための道具だ

何のために日本語を習得するかをはっきりさせる必要がある。人間が生きていくためには，人や社会を広く理解し，深く考えることが欠かせない。そのためには言葉が必要だし，話したり聞いたりする能力が要る。一人一人の日本人，あるいは日本に住む人にとって，日本語という言葉を使いこなせることが大切であり，それが豊かな人生につながる，ということを出発点にしたい。文化や伝統の継承というのは後からついてくるものだろう。

【K委員】

日本人として必要な国語力の目安

(1) 読む力

様々な文章を進んで読み、語句の意味を理解したり言葉の効果的な使い方などについて理解・鑑賞したりする力。

新聞や雑誌など日常の生活において目にする様々な文章の内容を正しく理解し、それを要約したり、感想を持ったりすることのできる力。

必要な情報を得るために図書館やインターネットなどを活用し、必要な文章を探し出し、その内容を読みとること。

(2) 書く力

必要や目的に応じて情報を集め、構成や表現などに注意しながら情報を生かした意図の明確な文章を書くことができる力。

事実や根拠などを明らかにしながら、論理的な文章を書くことができる力。

(3) 聞く力

事実や根拠、論理の展開などに注意しながら他者の話の内容を正確に聞き取る力。

相手の意図を考えながら、場所、目的、相手をわかまえたり相手の意図を考えたりしながら人の話を静かに聞こうとする態度。

(4) 話す力

相手、場、目的などに応じて適切な話題を選び、言葉選びや表現に注意しながら効果的に話す力。

話し合いが話題やねらいに沿って効果的に展開するように場の状況などを踏まえながら発言する力。

(5) 総合的な力

積極的に文章を読んだり他の人の話に耳を傾け、その内容を正しく理解するとともに批判したり考えのよい点などについてはそれを認めながら、自らの考えを深めていこうとする向上心。

国語力を身に付けるための対策

(1) 子供に対して

朝読書（読書の時間）を中・高等学校に義務づけ、高校生だけではなく、中学生にも卒業時まで読むべき本の目安（冊数や書名など）を示す。

12学級以上の学校については、授業をもたない専任の司書教諭を配置し、読書指導や読書相談などに当たらせる。

青少年にとっては、ただ本を読ませることだけではなく、読んだことを基にして意見の交換を行い、お互いの考えのよい点などを学び合いながら、人格の形成に生かしていくことが大切である。

読書の習慣を身に付けさせるためには、読書環境を整えるだけではなく、基礎的な能力、つまり内容の把握力、構成理解、表現の特徴を理解するなどの言語能力を高め、それを態度化につなげていくことが大切ではないか。

その他

<表題> 「伝え合う力」を高める

国語力を高めるためには、生徒が受け身になって授業を受けるのではなく主体的、体験的に話す、聞く、書く、読むなどの学習を積極的に取り入れて言語活動を活発にする工夫を大切にしていけることがより求められる。

人間形成の上で国語科の果たす役割の重要性が指摘されている割には、小・中・高校の国語科の授業時数が少なすぎる。次回の改訂では国語科の授業時数の増をすべきである。

不登校生徒の増加、人間関係をうまく築けない若者の増加などを考え合わせると、言葉により「伝え合う力」を高めることは人間形成の上でも大切なことであると考えられる。

教員のライフステージに応じた研修を一層充実させ、資質の向上を図る必要がある。

国語科教育は言語の教育であるということをより鮮明に打ち出す。つまり、言語により認識し、思考し、伝達し、想像や創造することをより確かにした言語能力の向上をめざすべきである。

【L 委員】

日本人として必要な国語力の目安

日本に生まれ生活している限り、努力する、しないに拘わらず日本語を使って意思疎通をはかっており、話す、聞く、読む、書くそれぞれの「ここまでは必要」という範囲を示すことは大変難しい。文法を知らなくても話せるし、字を書けなくても話せる。4つの要素のうちいちばん重要なのは「話す」能力であることは間違いない。これまでの読む、書くを中心にした日本語教育では、話すことにあまり力点を置いてこなかったように思う。今後は自分の考えを的確に伝える能力を養うことに重点を置いた教育を希望したい。

今の教育の現状を充分把握していないため、的はずれの指摘や、目標も相当大まかなものしか示せないことをお許しいただきたい。

(1) 読む力

新聞の記事を辞書なしで読み、理解できる程度の力を身につける。古文や漢文などは教養の一端として学校で入り口をさわれば充分。

(2) 書く力

これからの社会ではパソコンのワープロを使用して文や、メールを書くことが常識となるので（既に現在も）書ける漢字は常用漢字程度で十分である。文語体の文章から口語体の文章が増えることも予想される。伝えたい内容をどう整理して分かり易く表現するかの具体例として、様々な状況を前提にした手紙の書きわけが出来れば良いのではないか。

(3) 聞く力

読む、書く、話すにくらべて具体的にどの程度の力を身につけるべきかの範囲を示すことは難しい。相手が何を言いたいのか探りながら聞く（途中でさえぎらず）姿勢を身につけ、話のポイントを的確につかむことに尽きる。

(4) 話す力

自分の考えを明確に伝えたり、企画の提示説明（プレゼンテーション）がうまく出来るかどうかは今後益々重要になってくるので、どう分かり易く説得力を持って訴えられるかの訓練が必要。伝える内容の整理、明確化、話の組み立て、それをどのような調子で伝えると説得力が出るのかという表現方法。映像や、字幕などの上手な使い方も同時に学ぶ必要がある。（日本の学会での発表は発表者自身の自己満足型が多く、人に分かり易く説明する努力がほとんど欠けている。それにくらべ欧米人の発表は、ポイントを絞り、図形、映像などの使い方も実に上手である）

国語力を身に付けるための対策

(1) 子供に対して

読む

音読重視

黙読では間違った読みを修正できないので、小中学校では特に音読を重視したい。（漢字の読みと、意味の正しい把握の為）また名作、名場面などを名人の演じたもの（CDやテープ）を手本に、調子、間、声の表情などに注意しながら真似をして

みる。その為の音声テキストも必要。(外国語レッスンテープのようなもの)

読める漢字の範囲

常用漢字+ で十分であり、それ以外はルビ付きとしたい。(使用頻度が少ないとして「井」「柿」「岡」などやさしい漢字であるにも拘わらず常用漢字に入っていないもの、作り(旁)などから音が容易に類推できるものなど、新聞協会用語懇談会ではおよそ200の単漢字、熟語が再検討された経緯があり、+ はおよそ200字程度が妥当か)

辞書の日常的活用

疑問に思ったらすぐに辞書を引くという習慣を学生時代に身につけさせたい。諺の知識のない大人が増えている。

書く

文章の組み立て

重要な要素である5W1H(いつ、どこで、誰が、何をした、なぜの5Wと、どのようにの1H)について小学校高学年から中高まで一貫して教育する。伝えたい内容を短い文で書くことに関しては、携帯メールの普及で相当訓練出来ると思う。そこで300から400文字で要旨をまとめる(1分スピーチの訓練にもなる)1000文字程度でまとめる(3分スピーチ)などが出来るようにする。

書ける漢字の範囲

現在の学習指導要領に基づく漢字数を減らさないこと。但し、意味による文字(熟語)の選択能力(同音異義の学習)を高める必要がある。(追求と追及などの区別)

漢字の表意文字としての利点を生かす教育をして欲しい

魚偏に平らで鯡など。

話す

1分スピーチ、3分スピーチなど簡潔にまとめて話す訓練が重要。

集団討論(グループディスカッション)で、相手の話を注意深く聞き、論点を正確に捉え、それに対する自分の意見を冷静に述べる訓練。

若者言葉、流行語、短縮語 文語体を使わずに綺麗な日本語を話す練習を中学高校で取り入れてはどうか。(月に一回一時間、週に一回とか)

(2) 大人に対して

読む

ワープロソフト

ワープロソフトの初期設定では、常用漢字以外はルビ付き表記を義務づけたい。(難しい漢字に簡単に変換する今のソフトは、文書作成者自身が読めないというブラックユーモアの世界に陥っている)

人名にはルビを

新聞雑誌などでは人名には出来るだけルビをつける。漫画家の柴門ふみは「しもん」「しばかど」「さいもん」?

書く

役所特有のわかりにくい文書の改革が必要

何でも網羅的に羅列することで良しとする官公庁の文書は、主語から述語までの間があまりにも長く理解しにくい。今後は、小中学生でも理解できる口語文の短い文に変えてはどうか。

形式の廃止

ほとんどの人が意味も分からず使っている（使わされている）挨拶文などの不使用。「時下ますますご清祥の段、お慶び申し上げます」などは、誰に何を伝えたいのか？ うれしく思う人はいるのだろうか？

その他

<表題> 寺子屋の勧め

読書量が減り、新聞が読まれなくなり、情報誌などデータ中心の短い情報文が主流となってくると、文章を味わうことがなくなってくる。

日本語の文章を味わい、リズムの良さ、言葉の良さ、おもしろさ、楽しさを感じられなくなることに危機感を抱く人も増えつつある。その反映が齋藤先生の「声に出して読みたい日本語」などのヒットであろう。

昔の寺子屋のようにクラス全員で朗読し、全員が暗唱できるような教育も小中高のどこかに取り入れたい。

【M委員】

日本人として必要な国語力の目安

(1) 読む力

かなり高度な文学作品でもルビをふって読むチャンスを与えてあげるべきだと思います。

国語力を身に付けるための対策

(1) 子供に対して

パソコン、ケータイ電話、メール等、言葉は単語化され、変化します。しかし、これは致仕方のない事です。進化かも知れません。

ただ授業の中に作文や詩づくりや俳句等に接するチャンスを与えてあげる必要があると思います。

(2) 大人に対して

「その他」に書きました授業の中で先生がどのような方法で子供達に参加出来るかが重要です。出来るだけシンプルなお話づくりへのアドバイス。「超カワイイ」だけではない日本語の様々な有様、適切な言葉の発見等に協力出来る力が必要です。先生も一緒に子供達と考えていけば良いと思います。「国語辞典」を引きながら、教室の中で子供達と一緒に「言葉」の発見をしていけば良いと思います。

その他

<表題> 言葉の表現の時間

三省堂「現代の国語2」(中学生の為の国語教科書)に、平田オリザ氏の「対話を考える」というコーナーがあります。演劇を国語の時間に取り入れた最初のケースだと思います。演劇を使って「対話」の体験をする時間です。

演劇には、日本語を「読む」「聞く」「話す」「書く」等、日本語を知り、学ぶ為の様々な要素があります。又、他人とコミュニケーションを取るという人間教育の為の大事な要素もあります。

これ迄の分科会で出された様々な御意見をうかがっているうちに、やはり、演劇を国語の時間に取り入れるのが、具体的な方法ではないかと考えるようになりました。

小学三年生頃からはじめるのが良いのではないのでしょうか。「演劇」の時間として位置づけると、難しく感じられ、又、拒否反応も起るかもしれません。「言葉の時間」あるいは「表現の時間」としてはどうでしょうか。クラスを幾つかのグループに分けて台本づくりからはじめます。3分から5分位の出来事のお話づくりと言葉づくりをします。全員が一言でもセリフ言えるようにします。5人組なら5人の人間関係づくりからスタートし、小さなお話をつくってもらいます。それを全員の前でやってみせるのです。お父さんやお母さん、友達のお母さんも登場するようなお話なら、当然敬語を考える事になるでしょう。宇宙船が来たというようなお話でも良い、あり得ないようなお話でも良い、とにかく、言葉をつくり出す。言葉を話す。相手の言葉を聞く。それも大きな声で

相手に伝える。この実体験はある種の達成感を子供達にもたらすと思います。この際、上手や下手は問題ではありません。読書、書き取りの他にこういう時間が、今は、必要ではないでしょうか。

【N委員】

日本人として必要な国語力の目安

(1) 読む力

基本編 = 新聞の情報を(外来語の解読も含めて)きちんと読みとる力。

発展編 = 「言葉のバトンタッチ」への意欲を盛り上げる。

(老若世代間の「言葉の交流」を行いつつ)

(2) 書く力

基本編 = 二千字(原稿用紙5枚)で「自分の考え」をまとめ、人に理解させる力。

発展編 = 「平成万葉集」「平成カルタ」「平成句集」などを、国の規模で広く人々に呼びかけ編集。

自身で創作することで、古来の言葉(文化)への造詣を深める。

(3) 聞く力

基本編 = 30分集中して聴き、話の内容から要点を引き出す力。

発展編 = (民話、詩歌、故事来歴、ことわざなどの)「リレー語り」の集いの活性化。

(4) 話す力

基本編 = 10分で「自分の考え」を語り、人に理解させる力。

発展編 = 「もう一つの言葉(外国語=外国の文化)」を学ぶ楽しみを持つ。

(5) 総合的な力

「(古来の文化の中ではぐくまれた)成熟した言葉」

「(現代の動きの中で生まれつつある)若い言葉」

「(世界に目を向けて得られる)多彩な言葉」

この三本の柱を(インターネット、パソコンの機能を大いに活用しつつ)バランスよく獲得する力。

国語力を身に付けるための対策

(1)(2) 子供に対して・大人に対して

「共に」をキーワードに。

「大人」から「子供」へ、「教師」から「生徒」へ、という一方的指導方式でなく、時には役割交代をして、「共に国語の現在や方策を考える場」をつくる。

(役割が固定化しすぎている傾向があると思われますので)

そのために、「お互いに、聞き且つ語る」という形式や機会を考案し、活性化する。

.....たとえば、

テレビのドキュメントで見た光景ですが、スコットランドの村々で、老若男女が集い、自分の覚えている民話や昔話などを語り合い聞き合う集まりが、静かなブームになっていました。

(やはり「文化を受け継ぎ、伝えていこう」という試みのひとつでしょうね)

大人ばかりでなく、子供も自分が採取した話を語るのです(!。そこがよかった)

そんな形や場を、我々も作れば.....と願っています。

また、いま学校で「市井の教師」という形で、親たちが自分の仕事の内容や技を子供に「授業する」という形が増えていますが、それに加えて

子供たちが、自分たちのことを「大人に『授業』する」という時間もあれば、と思います。

(子供の話に「聞き入る」という時間を増やすのは大切だと思いますので)

そのために、「土曜日の活用」「開かれた学校」「図書館の多様な使い方」などを考える。

.....たとえば

休日となった土曜日の活用は、まだ模索中のようです。その活用を考えると、「肩書きをはずして交流する催し」を、いろいろ工夫できればと思います。

そのときの「場」として、休日の学校や地域の図書館を提供する。特に図書館は、従来の「本を借りて読む」だけの場でなく、いろんな活用法が考えられると思います。

現に「読み聞かせ」やコンサートの場として活用している図書館も増えてきています。もっとパソコンを活用する、映像を駆使する、などして多様な企画を練ることができるのではないのでしょうか。

プランコンテストなどを催して、智恵を集めることも可能だと思います。

【0委員】

日本人として必要な国語力の目安

- 小・中・高校の国語科教育で育成すべき「言葉の力」に限定して -

(1) 読む力

「読むこと」の授業をきっかけとして、読む楽しさやおもしろさを知り、授業外でも自分から進んで読書の分野や量を増やして読むことができる。

説明的な文章(報告文・説明文・意見文等)を、材料となる事実や資料の客観性・妥当性の評価、事実と意見・論拠と主張等の書き分け方、意味段落による文章構成の仕方、思考や論理の展開の方法等を中心に批判的に読みとり、自分の書く力・話す力に役立てることができる。

文学的な文章(特に、古文・漢文や韻文等)を、和語・漢語のリズム・響きや語感等に留意して、音読・朗読・群読・劇化等の方法で読み味わうことができる。

自分の課題解決のために調べ読みをするとき、図書館やインターネットを利用して広く図書資料や情報を探し、取捨選択して、目的に応じて適切に活用することができる。

(2) 書く力

説明文・報告文・意見文・調査研究の発表文、手紙文・連絡文等、社会生活に必要な各種の文章を、それぞれの文種の特徴を踏まえて書くことができる。

文章を書く目的や読み手を考えに入れて、題材や材料を選択し、言葉遣い・用語・文体・修辞・文章形式等を工夫して、効果的な表現を作り出すことができる。

筋道を立てて考えを深めるとともに、根拠を明確にして主張を展開し、自分の意見を読み手に説明し納得させる意見文を書く力を、特に重視して養う。

(3) 聞く力

教師や生徒相互の短い連絡・説明・解説等の内容を過不足なく聞き取ることができる。

聞き取りメモを書いたり、確かめるための質問をすることができる。

話を鵜呑みにせず批判的・創造的に聞いて、自分の考え・意見を組み立てることができる。

15分～1時間程度の講話や講演を、集中して聞くことができる。

(4) 話す力

聞き取りやすい発音・発声・アクセント等で話すとともに、時と場と相手に応じて音声(声量・速さ・声の調子等)をコントロールすることができる。

場や相手に応じて、用語や言葉遣い、話の内容や組み立てを工夫して話すことができる。

話し言葉で、自分の気持ちや考えを他者にはっきりと伝えることができる。

メモをもとにした意見発表や、表現方法を工夫した調査研究発表ができる。

対話や話し合いで、相互理解を深めたり、集団での課題解決を図ることができる。

話し言葉で、同世代間の人間関係を深め、異世代間の人間関係を作ることができる。

(5) 総合的な力

多様な人間関係を作る「広場の言葉」の基礎を身に付ける。

(場や相手に応じた声のコントロール、用語や言葉遣い、人称や敬語・待遇表現、挨拶・感謝・謝罪、依頼等、生活言語レベルの話し言葉の運用能力、話し言葉での人間関係形成力)

本を読む楽しさを知り、読書する習慣を身に付け、読書力を伸ばす。

(語彙力、通読力、速読力、感受性・想像力、認識力・思考力)

自分の課題解決のために、多様な情報を適切に活用する。

(情報収集・探索力、速読力・調べ読みの力、判断力・批判的思考力、課題追究力)

言葉を使って、自分の気持ちや考えをまとめたり深めたりするとともに、目的や場面に応じて自分の気持ちや考えを筋道を立てて表現しはっきりと他者に伝える。

(内言による自己認識力、論理的思考力、状況把握と話し言葉・書き言葉双方での自己表現力)

古典に親しみ、日本語の美しさや自国の言語文化に対する関心を深める。

(言語感覚、日本文化に対する理解と親しみ、言語文化の継承と創造)

(補足)

* 上記(1)～(4)で、各文の文末を「(...する)ことができる」とした。この場合、「こと」は言語活動を指す。各文末を「(...する)ことができる」としたのは、「子供の時期に身に付けておくべき国語力の目安を」という要請に従い、(1)～(4)の区分に従って、それぞれの力の内実を具体化・細分化して示し、それを言語活動として外在化して他者からも評価できるように示そうとしたものである。

国語力を身に付けるための対策

(1) 子供に対して 「学校教育での国語力育成」の基本方向と方策

今回の国語科学習指導要領改訂を方向付けた教科審答申の「言語の教育としての立場を重視し」特に、文学的な文章の詳細な読解に偏りがちであった指導の在り方を改め、自分の考えをもち、論理的に意見を述べる能力、目的や場面などに応じて適切に表現する能力、目的に応じた的確に読みとる能力や読書に親しむ態度を育てることを重視する」という考え方は、国語科教育の課題に正対している。小中高校をとおして国語科の授業時間を確保し、この基本方向での国語科教育の改善・改革を進めるべきである。

今回、小・中・高をとおして国語科の教科目標に挿入された「伝え合う力」は、「人間関係形成力」であると解する。この「人間関係形成力」の育成は、社会の変化・子供の実生活実態の変化に対応する教育課題として、全教育活動で重点的に取り組むべきものである。学習指導要領総則への格上げを望む。

学校教育で「話し言葉による異世代間の人間関係形成力」の基礎を育成するには、敬語や多様な挨拶表現等「広場の言葉」を使う「実の場」(異世代間の触れ合いの場)が設定されなければならない。この点からも、学校の教育活動の扉を内側へ・外側への両面で開いていく必要がある。

言語能力は言語活動を通して身に付く。特に「聞く力、話す力、話し合う力、書く力」の育成には、「教授」型から「生徒の言語活動中心」へ、授業方法の転換が不可欠である。国語科の目標(育てるべき言葉の力の明確化)に対応した学習方法や学習材の開発・紹介を全国的に進めることが課題となる。

読書については、これからの時代を生きる子供たちには、楽しみとしての読書、思索を深める心を耕す読書、自国の歴史や文化・伝統を継承する読書、教養としての読書が大切であるとともに、課題解決に向けた調べる読書、行動や判断の基となる情報収集の読書もまた不可欠である。学校では、国語科での読書指導、学校図書館を中心とした指導、朝の10分間読書等の全校的取り組みとともに、それだけでなく他教科や総合的学習の時

間，特別活動（ホームルーム活動・生徒会活動・学校行事），部活動等で，それぞれの教育活動に応じて多様な形で読書活動が追求される必要がある。

漢字については，これからの社会生活全般における「常用漢字表」の在り方や内容の検討と併せて，学校における漢字指導や漢字の取扱いの再検討が必要である。具体的には，学校教育で常用漢字以外の漢字でも振り仮名（ルビ）を付けて提示できるようにする「読めて，語句としての意味・用法を理解でき，ワープロ等で使える漢字の使用を認める」等のことが考えられる。

方策 学校教育での国語力育成」のための援助と条件整備

子供の言語力（特に，聞く力・話す力・書く力）」の実態把握。全国的 継続的な実態調査。

海外における母国語教育カリキュラムの研究と紹介。

高校入試・大学入試への日本語力テスト（特に，書く力及び聞く力・話す力・話し合う力を重視）の導入。（国レベルの「日本語力検定試験」実施と，大学入試等における結果利用も含めて）

言語教育の指導力（特に，話す力・聞く力にかかわる指導力不足）向上を図る教員研修の実施。

朝の読書活動」「必読 30冊」等の読書活動推進を支える予算措置，子供むけルビ付図書の刊行。

情報・資料センター，学習センターとしての学校図書館の整備，公共図書館とのネットワーク化。

国・地域での，朗読・群読・劇化等のコンテストや，スピーチ・ディベート大会等の継続的開催。

学校教育における漢字の取扱基準及び漢字指導の検討。

【P 委員】

日本人として必要な国語力の目安

(1)(2)(3)(4)(5) 読む力・書く力・聞く力・話す力・総合的な力

すべての日本人が最低限新聞（全国紙）を読み、理解できる力は必要。しかし国語力の基礎は変化している情報伝達媒介言語に接するだけでは養われず、客観評価の定まった高位文学作品、評論等を実際に読み、表現のレベルと主題と意図とのかかわりを体得する必要がある。

内容読解力に加えて、ある程度の内容と分量を最後まで読み通す力が必要と考える。現在の新聞雑誌記事は、単体テーマを点として最小限必要な表層情報を並べただけのものが多く、新刊書もハウツウもの、対話座談形式、連載短文をまとめたタイプなどが多く、どこから読んでもかまわない辞書形式に近くなってきている。ジャーナリストイックで読みやすいことは間違いないが、心に残ること少なく、繰り返すうちに読み捨てに慣れてしまい思考構築力が弱くなる。消耗情報を追うだけでなく、主題（テーマ）、筋（プロット）、内容コンテンツを備えた世界、即ち小説、エッセイ、伝記、ミステリー、評論、歴史、詩歌など、生きるものと社会、環境等へのかかわりや経験を読書を通じて養うことは必要。読む力とは、何を読むかを選べる力でもあると考えるが、その力の基礎は子供の時期に養われる。

国語力を身に付けるための対策

(1) 子供に対して

読む力

子供の時期に読む楽しさ、物語の展開のすばらしさを待ちかねるといった状況創造がもっとも必要と考える。とくに子供が最初から文字を通しての読書に没入することを期待するのは無理であり、幼児期より、わくわくする物語、昔話、童話、偉人伝記、動物のはなしなどを読んで聞かせる、または劇やままごとの登場人物として体験させたり、スタッフ役を経験させると効果がある。この場合、()ストーリーの筋に展開があり、()記述が具体的で興味を引き起こし(たとえば子供の好きなものの描写、外国が舞台であれば景色、植物、動物、建物、衣服がどうであるかなど、)()話に普遍性、共感を持てるテーマがあることが不可欠であり、こどもをストーリーにひきこみ、ひいては自発的な読書の習慣も期待できる。本が読めるようになったら是非自分で読みたいと思わせるよう、読むことにあこがれ読書を好きになるよう美しい音、調べに乗ったことばで聞かせること、また技術的には「千一夜物語」と同じく()一度で物語を完結させず次回に続けて、期待を膨らませることが肝要と考える。

書く力

IT や最新通信モードが大人はもちろん低学年にも影響をおよぼしているが、それゆえにこそ、手紙やはがきを自分で書くことを国語教育の必須とすべきと考える。コンピュータソフトをつかわず、年賀状、お見舞い状、クリスマスカードなどの自筆作成に加え、できれば理科や園芸学習の中で、季節の変化を知って感じて絵を書き、えはがきに短い言葉を書き添える「季節便り」等を指導できる。空気の温度、空の色、鳥や昆虫の様子、草花の生育など、これら自然の観察は日本独自の季語の感覚導入にもつながる。

聞く力

聞く力は、初めて聞く話からどれだけ正確に内容を理解し、要点を把握できるかであり、一般的に使われる慣用句、ことわざ、故事来歴などの知識が必要となる。通常の授業からはなれて、教師または外部の第三者によるフリートークや講演を通じて、予習無し、教科書無しでの授業で聞く力を養う。理想的には週一回、すくなくとも月一回これを行い、その場での質疑応答を通じて耳で聞いた内容を確認、敷衍、絞り込むことを習う。

話す力

誰かに自分の心を訴えたい、考えや経験したことを伝達して相手と分け合いたいという強い望みや必要が無ければ、話す力は育たない。何を言いたいのか、結果として何を望むのかをまずはっきりさせ、相対者とともに話す項目、順序を策定する。内容が第一義でなく、話しあうこと自体が目的であれば、声を掛けることから始まり挨拶になる。わが国における挨拶の伝統は他国言語にない独自のものであり、教育課程内に付記すべきと考える。

総合的な力

現在求められている文化の基礎としての総合的な国語力を問うならば、もはや日本の言語、文学、伝統に限定した「国語教科、日本語」としてのみとらえるのでは不十分であり、従来の国語教科を超えて教えられる必要があると考える。私達が議論する国語力の実態は、伝統、理念、哲学、宗教、教養、歴史、教育、芸術、科学、生活の場そのものを包含する文化の礎であり、西欧教育で言うリベラルアーツとしてとらえるべきではないか。大学教育現場での一般教養の不足が指摘される今日、国語力を軸としたリベラルアーツ課程の整備を初等中等教育から検討する時期ではないかと考える。

(2) 大人に対して

二葉亭四迷の言文一致以来近代文学は最盛期を過ぎたかに見え、現代の名作の評価が未定の今、古典の語彙と自由な表現力の的確さ、ゆたかさに開眼させられる。したがっておとなはとくに古典に親しむ必要があると思うが、若いころに学校で履修していないとなかなか縁遠い。義務的に取り組むのではなく、俳句、古典芸能などを趣味として取り組むのも良い方法ではないか。

【Q委員】

国語力を身に付けるための対策

(1) 子供に対して

子供というのがどの程度の年齢を示しているのかが不明ですが、とりあえず高校生迄と仮定します。

日本の昔話から近代文学までを、学年に応じて副読本として読ませる。教科書からかつての文豪の文章が消え、現代のエッセイストらの文章が載るのは言語道断。子供がとっつきやすいようにという配慮だろうが、配慮というより子供への媚を感じる。難しく逆に国語が嫌いになるのではという心配より、やさしく面白く教えるよう教師や親が考えるべき。学ぶべき。

歳時記を読ませる。情緒を養うという上で、これはかなり効果があるはず。

(2) 大人に対して

上記の(子供に対して)とまったく同じ。大人は今、大相撲の4分間の仕切り時間にメールを打ち、ボクシングの各ラウンド1分間のインターバルにメールを打つ。それもメール用の略語で。

つくづく日本人は文化を失ったと思う。精神文化に至っては壊滅的だ。

その他

<表題> 気になる2点の問題

中高年の言葉の乱れが気になる。

デパートで配送を頼んだ時、中年の女店員が「ここにお名前様とお所様をお書き下さい」と言い、さらには「略図様の方とかも書いて下さい」と言われ、天を仰いだ。別の店では支払いにカードを出すと、中年の女主人が「おカード様からおあずかり致します」ときた。つくづく世も末だと思った。私はしょっちゅう週刊誌などに言葉のことを書くが、反響は大きいのに効果はない。何か広く伝えるいい方法はないものか。

若い人から中高年まで情緒を理解しえなくなっていることが気になる。

さまざまな理由はあるだろうが、あまりにも進みすぎたデジタル化も原因だろう。デジタルは情緒とは無縁のものであり、それはそれでひとつの道具としては大切だ。ただ、デジタルと並行させ、アナログを取り戻さないと、今に人間は間違いなくサイボーグになる。私は、できる限り、それをメディアで訴えてはいるが、と同様、広く伝えることを本気で考える時期だと思う。すでに手遅れだと思ってもいるが、やらないよりはましだろう。

【R委員】

その他

<表題> これからの時代に求められる国語力

1 国際化社会に対応して

「これからの時代に求められる分析力や論理的思考力」において、日本人が受けてきた国語教育は十分とは言いがたい。大学生が、友人とのとりとめもないおしゃべりに興じて、公に対してははっきりとした発音で内容のあることを話す力は非常に劣っていると言わねばならない。それは、発音の仕方が悪いこともあろうが、それより、何を話したらよいか、話すための思考力が弱いためであろう。この点の訓練がなされる場が少ない。

話し手が何を言いたいのかを明確にする思考能力の訓練はどのように身につけることができるのであろうか。他人の書いたものを朗読したり、丸暗記するのは、それが名文であろうとも、大学レベルでの思考訓練には不相当だと思われる。大学生ほどの成人になれば、それまでの人生経験や知識の蓄積を踏まえた借り物でない自分自身の考えがあるはずである。それは往々にして自分自身で考えても複雑でもやもやしたものであろうが、そのもやもやを分析、整理し、それを論理的に組み立てて相手に分かるように表現する訓練がなされる必要がある。

小、中、高の教育で作文教育が行われてきているが、大学レベルの作文教育では、自分の思考を他人に分かるように分析し、構造化し（アウトライン作り）、順序立てて表現する訓練に集中すべきである。高等教育を受けるという社会的使命を持つ、つまり、社会でのさまざまなレベルでのリーダーシップをとり、責任を果たすべき人間には特に必要なことであろう。

この教育は、まず、書くことで訓練し、その後、話す訓練に移行することが効果的であろう。また、この分析力、論理的思考力の訓練は、大学での教養教育の中心をなすべきものであろう。これは、国際化社会で生きて行かねばならないこれからの日本人の国語力として大切な要素であると考えられる。

このことは、英語力にも直接繋がる。日本人の英語力の貧しさには残念ながら定評があるが、これは、日本語で分析的、論理的な思考訓練が積極的になされてこなかったこととも関係があろう。日本語でそのような訓練が出来ていれば、それが下地となって英語の運用能力は向上するであろう。

2 情報を述べることと心情を述べること：日本語の本質を見極めて

国語を通じて感性や心を磨くことができる。一方、国語を通じて情報の伝達をすることもできる。その両方が国語力に求められる。上記の分析的、論理的思考のための言葉の訓練は、後者のための訓練である。では、心情を述べ、感性や心を磨くための国語と論理的思考のための国語とはどのような関係にあるのであろうか。

この二つは、表裏の関係にあると考える。国語教育においては、その関係に注目し、それを明確に認識し、それを意識的に教材、教授法などで扱うことが望まれる。

表裏の関係にあることを例を挙げて述べた拙文を以下に引用する（読売新聞 1997）。ここでは、日本語では思いやりやわきまへの心情を表現しがちな文法装置があることで、論理的思考を妨げやすくなっているさまを解き明かしている。しかし、これらの装置が日本語に内在するものの、それから解き放たれた論理的思考ができないというわけではない。日本語に内在する心情や態度を表す表現があることを国語の教育者が強く意識してはじめて、論理的思考への訓練の道が拓かれると考える。

日本人のことは遣い

国際化時代に考える

「そうですねえ、よく伸びて入ってくれたと思います。」プロ野球開幕戦で連続3ホームランを打った阪神の小早川選手の弁。ボールがあたかも行為者で「よく伸びて（スタンドに）入って」彼のためにやって「くれた」と捉えて表現する。このような言い方は、日本人には感じ良いと受け取られるようだ。

「あの人の言う事はわかるけど、言い方がねえ...」という非難をよく聞く。日本では、何をいうかより言い方が問題である。内容を論理的に述べて「説得する」より、聞き手や場面に配慮して「納得させる」言い方の方に徳がある。

このことは、日本語の話しことばの文の構造と関係があると考えられる。西欧語では「X is Y」と発話内容のみを言うだけで話しことばが成り立つ。日本語では、be 動詞に相当する中立的な表現がない。そこで be 動詞にあたる述語は、さまざまな表現を使い分けることになる。「X は Y だ」、「X は Y である」、「X は Y です」、「X は Y でございます」というように。話し手は、発話内容と同時に、話しの内容をどう捉えているか、相手や場面をどうわきまえているかを表現する。「X は Y である」は小学生を相手にした先生の発話としては堅すぎる。「X は Y です」や「X は Y だ（ね）」を場面のくだけ方や先生の生徒への気持ちに応じて表現する。話し手の態度の表現は、日本語の話しことばには構造上不可欠なのである。

西欧語では話し手の態度の表現が不可能であると言っているのではない。助動詞や修飾語等を駆使したり構文を複雑にしたりすればできないことはない。日本語は、補助動詞や助動詞や終助詞などの文法形式をいくつも述語の後部に連ねることのできる膠着言語の一つである。主語のすぐ後に述語がくる西欧語と異なる。「（何々を） させていただきます よ」は使役、授受表現、敬語（丁寧語）、終助詞を連ねた表現である。この一連の表現で、話し手は、使役表現「させて」で相手の立場に自分を置き、自らを受け身の立場にし、「もらう」の謙譲語「いただき」で敬意を示しつつ相手から動作を授けてもらう。丁寧語「ます」で相手や場面に対して丁寧に、終助詞「よ」で話し手が情報を受容している状態を表現する。

英語では「She is sad.」と言えるのに、「彼女は寂しい」とは言えない。日本語では「彼

女は寂しそうよ」「彼女は寂しいようです」などと言わなくてはならない。自分のことについていうときでも「私は寂しいの」「僕は寂しいんだ」と言うのが普通。「私は寂しい」では、宙ぶらりんの発話になる。英語と違って客観的な叙述だけですまされない。日本語の話しことばの構造は、情報内容に加え、情報と場面を話し手がどう捉えるかを表現するようになっている。

話し手の態度表現は、文末の文法表現にとどまらない。「私ばかり、二度も発言して恐縮ですが...」と前置きして発言する。まだ発言していない人もいる会議の場で。まわりの人を気遣い、和を求める文化の共有を表明する。「はっきり言えば...」と言って、本当はあいまいに表現したい嫌な情報の予告をする。「いつもお世話になっています。」と言って恩恵を受けている人間関係を確認する。このようなことば遣いは、人間関係潤滑油として日本社会に頻繁にみられる。情報内容はゼロだが気遣い表現となっている。

この表現習慣は、日本社会・文化にどんな効果をもたらしているのであろうか。発話のたびに適切に気遣いを表現することはやっかいである。だが、その苦労は相手に安心感を与え、ひいては話し手も安心する効果を醸し出す。小早川の弁は、自分のために他人（この場合は球）が動作をし、それで自分が恩恵を受けたことを「くれた」と表現する。関係の中に自分が生かされていることを適格に示す言語手段である。東洋人の美德とする謙虚さを演出している。いわゆる敬語の使用は、組織の中の上下関係、先輩・後輩の序列、ウチ・ソトの区別や場面の改まりのわきまえを確認する。気遣いを最も顕著に表現する日本語の文法構造である。相手を安心させ、相手の心をウチに向けさせる。世代、役割あるいは親疎の異なりを越えた人間関係を複雑に捉え、適度に求心力を作る効果があると思われる。戦後日本経済のめざましい発展の秘密の一つ、信頼ある人間関係造りに貢献してきたといえよう。

しかし、この表現習慣は、客観的に捉えるべき事柄をあいまいにしかねない。目前の利害を越えた、広く高い視野での思考と発言を難しくする。事柄の客観的把握と広い見識に基づく論理的な議論は、国際化社会のコミュニケーションの基本である。国際舞台での日本人の議論下手は、この表現習慣と無関係ではないと思われる。

【S 委員】

その他

<表題> 国語力をどう考えるか

1 前置き

国語力を、話すこと、聞くこと、書くこと、読むことの各領域に関係づけて検討するに際して、現状としての日本人の言語生活、現学習指導要領の問題を考慮に入れなければならない。日本人の言語生活に関しては簡単な見取り図を述べるが、現学習指導要領に関しては周知の内容だという意味で取り上げていない。なお、この宿題の回答は、表現の細部では現学習指導要領との間で違いが出るところがあるが、大綱においては違いがない。なおまた、「国語力」を口調の上で「言語能力」と記したりしているが、他意はない。

2 日本人の言語生活の現状

日本人の言語生活の現況としては、次の2点を考慮に入れる必要がある。第1は、人口が大都市に集中して、知らない者同士が人間的な接触をもちえないかたちで生活を営んでいる状況である。例えば電車やバスを乗り継いで勤務先や学校に通う場合、同じ車両に居合わせた乗客は、何らの関わりを持たない第三者でしかない。

人間関係が比較的強く意識される場としては、親密な関係の家族やほぼ対等の友人関係を別にすると、職場、学校、また、何らかの組織・集団がある。しかし、例えば職場であっても部署が同じかどうかによって人間関係が大きく変わってくる。

人間関係が強く出るのは、同じ勤務先の上司と部下、社員と取引先の相手、店員と客などというように極めて限られた状況である。

例えばコンビニエンス・ストアの利用客の場合、入店した時点から、次々にあいさつを中心とした言葉のシャワーを店員から浴びることになる。買い物を済ませて、店を出るまで、一言もものを言わない客が少なくないが、もしも、店員が何らかの言葉を省くことによって、客をぞんざいに扱ったとしたら、どうであろうか。客はたちまち、「自分は客だ」という優越的高圧的な態度に出て店員を非難することであろう。一方で、店員の話し言葉がマニュアル言葉になっているということで、一方的に非難されがちである。しかし、自分は無言化の姿勢をとりながらも店員の発言だけは評価し続けている客の言語行動は容認されている。上で、一方的に流露するという意味で「言葉のシャワー」という言い方をしたが、双方向的な交流、つまり、伝え合いの成立が期待される。

なお、こういう店員と客という特殊化した言語環境は、上記の同じ会社における上司と部下の間にも見ることができる。部下がていねいに朝のあいさつを行うが、上司は返事もしないし、顔を向けることもしない。しかし、部下のあいさつの仕方に関してはあれこれ苦情を言う。

そういう現在の窮屈な関係を、一人一人の人間関係に戻すことによって、人間的なコミュニケーションを図る必要があるわけである。

なお、こうした人口の都市化の問題は、日本の国際化に連動している。海外旅行に出かけたり外国に移住したりする日本人が増えているし、多くの外国人が日本を旅行し、また、日本の各地に移り住んでいる。同じ地域に住む日本人と外国人の間にどういう人間関係がつくられているであろうか。相手の存在を意識しながらも、言動面で何らの関

係を築こうとしない点では、大都市の電車における乗客の関係と同一である。

すなわち、人口の都市集中化、また、日本の国際化、更には核家族化（この問題に関しては具体化していない）などによって、人間関係が希薄になってきているのである。そういう状況を踏まえることによって、いわゆるコミュニケーション能力の育成の課題が求められるのである。

次に、日本人の言語生活の現況の第2としては、日本人の年齢が全体として高くなって、人口に占める熟年層の割合が増大してきていることである。これは、国語力の育成が学校教育だけでなく、幼児期から熟年期までというように、生涯教育に大きく関わらなければならないことを示している。幼児期における国語力の育成、社会人としての国語力の拡充、そして、引退後における国語力の充実といった問題が考えられる。

最近の日本語関係図書の購入者の多くが熟年層であるとも言われている。そうした現象は、国語力育成の問題が、学校教育に重点を置く必要があるが、そこだけに限定できないことを示している。

3 日本人の国語力を大きく3種に区分してみよう

日本人の国語力を検討するに際して、日本人の多様な生活態度を考慮に入れることによって、当の国語力を大きく3種類に分類することにしたい。

第1種は、家族や地域における国語力である。あいさつ、共感、同情などの用語でとらえることができる。人間性が中心におかれる。

第2種は、社会人として必要な実用的な言語能力である。説明、思考、論理、認識などの言語能力を表す用語でとらえることができる。

第3種は、生涯教育に通じるところが大きい。自らの人間的精神的な生活を充実させるために、伝統文化を含めた各種の言語文化にふれることである。

これら3種の国語力は、強弱の違いはあるが、いずれの時期であっても習得させるべき能力ではあるが、一応、第1種が乳幼児期、第2種が成人期、第3種が熟年期というように図解的に整理できよう。そして、学校教育期は、これら3種を体系的系統的に習得させる時期ということになる。

4 人間的な関係をつくる国語力

乳幼児は特に家族からの各種の言語的な働きかけによって言語能力が発達するとされている。人間としての感情の発達に関しても言語的な支えが小さくない。そうした乳幼児の言語能力を家族中心の各種の言語的な働きかけによって円満に育てていく必要がある。この乳幼児期に培われた言語能力は、その後の学校教育期における第1～3種の各言語発達を支えることになる。

そういう意味で、親子の会話や家族による絵本の読み聞かせなどを行うようにしたいものである。小学校入学前の幼児の語彙力は、ほぼ5,000語である。それらの中には、学校生活や社会生活で身につけるべき用語は多くは含まれていない。しかし、家族や親戚、幼稚園・保育園、そして、地域などにおいて必要な語彙が豊富であれば、小学校入学後の語彙力は十分に期待することができる。

5 実用的な言語能力

主として実社会に出ていよいよ働こうとする人々は、実用的な国語力を具備しておかなければならない。それは、話すこと、聞くこと、読むこと、書くこと、全領域にかかわる言語能力である。この実用的な言語能力としては、話すこと、聞くこと、書くこと、読むことの各領域においても、何よりも実効性を大切にすべきである。

例えば「話すこと」及び「聞くこと」、すなわち、「伝えあうこと」で言えば、各種の

あいさつ，自らや自らの問題意識の紹介，電話での応答，直接の交渉，社内の相談など多岐にわたる発信及び受信活動で成り立っている。そこでは，相手への配慮と同時に日本語による思考力，認識力，判断力，論理の組み立て能力などが必須の能力になる。そして，これらの会話能力の基礎的部分は，学校教育の中で育成しておく必要がある。実用的な言語能力としての「読む」能力は，例えば文学作品の読解などではない。例えば，ある課題を解決するために数冊の図書を選定し，必要な箇所を要約したり，抜書きしたりできる能力が求められる。また，相手から送られてきた要求に関する文書を読んで，そのよりよい解決策を求めるような読みということである。

6 教養としての国語力

教養としての国語力は，日本の言語文化の継承と享受の問題にかかわっている。祖先が長い年月の中で築き上げてきた日本の各種の言語文化をどのように継承し，享受するかという問題である。これは，生涯教育の視点で考える必要があるであろう。

例えば、『声に出して読みたい日本語』（齋藤孝著）は，それはそれで結構な提案になっているが，生涯教育の観点で見ると，今後は，文学作品，古典作品の場合は，引用されている一節を含む作品全体を通読する方向の展開が望まれる。単に引用されている章節を声に出して読むというのでは，言語文化の継承にはなりにくい。通読することによって，全体に位置づけた部分的な価値を知るようにしたい。

昭和の各年代は例外もあったが，文学全集がよく企画・刊行されていた。古典文学にしても複数の全集が刊行されていた。ところが，近年は，そうした全集に関する新しい企画の声をほとんど聞かない。日本人は忙しくなったのであろうか。他のメディアに割く時間が増加した結果，時間をかけた読書が困難になったのであろうか。

ところで，この4，5年間に日本語に関する図書が数多く刊行され，一種のブームになっている。その背後には，漢字能力検定試験や日本語力測定試験などの普及・定着があるし，英語公用語論などへの反発も生じているようである。結果的に日本人が自らの国語力を振り返ることになったのである。他方，中学校の国語教科書から夏目漱石や森鷗外の作品が消えたという問題がある。森鷗外でいうと，昭和50年代までは「最後の一句」が取り上げられていたが，ジェンダーの問題もあって取り下げられ，「高瀬舟」が教材化されたが，中学生に安楽死の問題を突きつけることの善し悪しの問題が生じて，結局は取り下げられたのである。

さて，数多くの日本語関係の図書は，大きくは，次の4種に整理できそうである。

『声に出して読みたい日本語』（齋藤孝著）のように，かつて人口に膾炙された作品の一節をまとめた図書。類書が数多く刊行されている。なお，本書にも小学校から高等学校までの国語教科書に掲載された作品が取り上げられているということから，かつての国語教科書に掲載された作品集という幾種類もの企画を見ることができる。

『常識として知っておきたい日本語』（柴田武著）のように，故事成語やことわざなど，国語の常識を分かりやすく解説した図書。ここには，評判を呼んだ岩波新書『日本語練習帳』（大野晋著）なども含まれる。これも類書が数多く刊行されている。自らの国語力を確かめたい，不足する日本の言語文化に関する知識，情報を補充したいなどという現代人の願いの現れと見ることができる。

『美しい日本語のすすめ』（美しい日本語について語る会編）日本語の魅力を専門的な見地から解説する図書。ここには，『声の力 歌・語り・子ども』（河合隼雄，阪田寛夫，谷川俊太郎，池田直樹著）もあるし，外から発見した日本語の価値を説く『美しく面白い日本語』（ピーター・フランクル著）もある。日本語のおもしろさや美

しさなどを具体的に指摘しているので、大いに参考になる。

『豊かな言語の担い手になるために』(大岡信著)のように、国語学習の在り方を根本に立ち返って分かりやすく説明した図書。ここには、更に音声言語に限定しているが、『発声と身体のレッスン—魅力的な「こえ」と「からだ」を作るために—』(鴻上尚史著)なども含まれる。大岡信氏の本書は、読み直すと、国語教育の在り方がよくわかる内容になっている。

なお、ここに掲げた図書中の柴田武氏及び大岡信氏の2文献は、いわゆる再刊本である。機運もあって、こうした本格的な図書まで再刊されていることはまことに慶賀すべき現象といえよう。

7 学校教育における国語力

学校教育では、「3」に掲げた3種の国語力全体の育成に努める必要がある。学習指導要領では、第1の家族間で育まれる国語力に関しては、例えば「あいさつの励行」などのように、具体的な言語習慣の問題として取り上げている。

学習指導要領は、戦後約50年間を振り返ってみると、第2の実用的な国語力と第3の教養としての国語力の両方を大切にされた扱いになっている。ただし、長年、第3の言語文化に基づく国語力を前面に掲げてきたが、現行の学習指導要領は第2の実用的な国語力を前面に打ち出した。すなわち、ここ3、4年間に各分野から提起されている国語力の在り方に関する問題は、この言語文化的な扱いを軽くしたことが引き金になっているように思われる。

学校教育の中の国語科は、次の2種の目的を持っている。第1は、学校教育全体を支える(各教科の学習活動を支える)上で必要な言語能力を育成することである。第2は、文学作品の理解・鑑賞をはじめとする言語文化を学習することである。この中で、国語科の教師は、第2の目的をより大切にしている。そこで、現行学習指導要領が、第1でなくて第2の実用的な言語能力を前面に掲げたということで、かなり反発を感じている。これは、教師だけでなく、文学関係者や演劇関係者などにも共通する所である。

以下、話すこと、聞くこと、書くこと、読むことの各言語領域に分けて述べてみたい。

8 話すこと

自分の思いや考えをわかりやすく相手に伝えることができる。

ある主題に関して聞き手の興味を引くような簡潔で面白い話ができる。

ある問題について資料等を使って内容を説明できる。

日本人は、口より手の方がはやりなどといわれる。話合いが苦手なところがある。状況を改めうるような話し方ができるようにしたい。国語科の目標に掲げられた「伝え合う」という用語は、日本人の話合いの根本に関係している。討論、討議、ディベートなどの用語は、いずれも「穏当」を欠くらいがある。

9 聞くこと

常用漢字には「聞く」「聴く」2種の漢字がある。後の「聴く」能力は一般に精神的あるいは根性の問題として片付けられていて、技能・技術的な面で十分には検討されていない。国語科の授業の中で、「聴く」能力の育成を図る必要がある。誰からどういうことを聴くのか、聴いてどうするのかなどの問題があるが、「聴く」を中心においた国語科の研究はほとんど進展していない。

日本は視聴覚機器が世界に先駆けて開発されているが、言語教育におけるその活用面が粗略になっている。放送を聴く、講演を聴く、何らかの録音を聴いて問題点を見いだ

す、お話や読み聞かせなどを楽しむ、また、要点をメモしながら聴くといった指導が期待される。

10 書くこと

これまでの国語科で行われてきた「書くこと」の指導は、読み手が不在で、しかも、目的をもたない「作文」が中心で、他に感想文などがある。相手意識、目的意識を十分に喚起した「書くこと」の指導が期待される。特に、第2の実用的な言語能力の育成の問題としてとらえると、手紙、報告文などの指導が重視されることになる。依頼、質問、感謝などという実用的な手紙の指導は、国語科では、この20～30年間、ほとんど取り上げられなかった。文学者の手紙が時に取り上げられることがあるが、「総合的な学習」に役立つ手紙は、文学的な香りを含まない実用的な内容になる。

11 読むこと

読むといえば、文学作品、あるいは古典を読むことだと考える人が少なくない。物語、小説を読むことは楽しい行為である。読書指導の展開として、興味深い作品を選ぶ能力も育てるようにしたい。そう考えていくと、文学作品の読みの指導だけでもかなりの時間を必要とする。しかし、第2の実用的な国語力で言うと、説明的な文章、それも、契約に関する、あるいは何らかの要領に関する文章を読む機会が多くなる。

そういう意味では、すでに指摘したように、一冊の図書を通読したり、ある名文を声に出して読んだりするのでなく、課題解決の上で必要な箇所を抜き書きするような読み取りが一方では求められている。現行学習指導要領は、「読解」にかかる時間を軽減させようとしている。第3の国語力、すなわち、教養として身に付けようとする国語力のためには味わい読みが求められる。その味わい読みとしては、古典の学習がある。他方、第2の実用的な国語力のためには、いわゆる斜め読みができるような指導が必要である。

12 終わりに

上記の「話すこと」から「読むこと」までの各国語力に関しては、「読むこと」と「話すこと」の2領域間における言語活動としての有機的關係というように、2領域あるいは3領域における相関的な関係にまで検討を進める必要があるかもしれない。特に「総合的な学習」を支える国語力としては、4領域の組合せによる言語活動が大枠として設定されることになるが、この回答ではそこにまで至っていない。



子供たちに読んでもらいたい本のリストの構想について

分科会では、審議経過の概要を取りまとめるに当たって、平成14年12月に、委員を対象として、「審議経過の概要をまとめるに当たって委員として提案しておきたい具体的方策」に関するアンケートを実施した。

本アンケートは、これからの時代に求められる国語力を身に付けるための具体的方策についての提案を、各委員の自由な判断に基づいて提出することとしたものである。

具体的方策についての委員からの提案については、審議経過の概要を取りまとめるに当たって議論し、必要な部分は審議経過の概要の中に取り入れた。

また、本アンケートにおいては、分科会において委員から「子供たちに読んでもらいたい本のリストを作って広く示すべきではないか」という意見が出されたことを踏まえ、どのような本を子供たちに読んでもらいたいかということについて、考えを持つ委員から提案があった。

子供たちに読んでもらいたい本のリストについては、議論の過程において、審議会自体がそのようなリストを提示することが必要かどうか、本への興味はいわゆる「つまらない本」も含めて多読乱読から生まれるのであり、そのような環境を作ることがむしろ重要ではないかなど様々な意見が出されており、今後、議論を要する。

今回の資料については、飽くまでも各委員の自由な意思で提出されたものであり、分科会で議論されたものではないが、今後、「子供たちに読んでもらいたい本のリスト」の必要性等について検討していくに当たって、国民にもイメージを持っていただくために、参考資料として広く公表することにしたものである。

なお、今回、二人の委員から提出されているが、これらについては、それぞれの委員の考えに基づいて提出されたものであることから、それぞれの委員の了解を得て、名前を添えて公表することとした。

小林一仁委員 54

齋藤 孝委員 56

小林一仁委員

高校生対象

〔小説〕

森鷗外	「舞姫」
夏目漱石	「三四郎」
志賀直哉	「城の崎にて」
芥川龍之介	「奉教人の死」
宮沢賢治	「セロ弾きのゴーシュ」
川端康成	「伊豆の踊子」
石川達三	「生きている兵隊」
大岡昇平	「野火」
井伏鱒二	「黒い雨」
井上靖	「天平の薨」
大江健三郎	「死者の奢り」
安部公房	「砂の女」
北杜夫	「楡家の人々」
遠藤周作	「深い河」

〔詩歌〕

萩原朔太郎詩集	『月に吠える』など
高村光太郎詩集	『智恵子抄』など
中原中也詩集	『在りし日の歌』など
正岡子規	『病牀六尺』
石川啄木歌集	『一握の砂』など
会津八一歌集	『自註鹿鳴集』
塚本邦雄	『茂吉』『赤光』百首』
山本健吉	『現代俳句（上下）』
大岡信	『折々のうた』シリーズ

〔随筆・評論ほか〕

福沢諭吉	『福翁自伝』
夏目漱石	「私の個人主義」
鈴木範久	『内村鑑三』
三木清	『人生論ノート』
寺田寅彦	「科学者とあたま」など（『寺田寅彦随筆集』中）
中谷宇吉郎	『雪』
柳田國男	随筆「雪国の春」など
柳宗悦	『手仕事の日本』
宮本常一	『忘れられた日本人』
和辻哲郎	『古寺巡礼』

谷崎潤一郎 『陰翳礼讃』
堀辰雄 「浄瑠璃寺の春」
東山魁夷 「風景」(『日本の美を求めて』)
日本戦没学生記念会編 『きけわだつみのこえ』
司馬遼太郎 『十六の話』
波多野誼余夫・稲垣佳世子 『知的好奇心』
岡本夏木 『ことばと発達』
大野晋 『日本語練習帳』
丸山真男 『「である」ことと「する」こと』
(『日本の思想』中)

〔古典への誘い〕

北山茂夫 『万葉の世紀』
秋山虔 『源氏物語』
石母田正 『平家物語』
堀田善衛 『方丈記私記』
小林秀雄 「徒然草」など(『無常といふ事』中)
尾形侑 『芭蕉の世界』

齋藤孝委員

- 新美南吉童話集
宮沢賢治童話集
星新一 『きまぐれロボット』
『0・ヘンリ短編集』
高史明 『生きることの意味』
『広島二中一年生全滅の記録』
トルストイ 「人にはどれほどの土地がいるか」 『イワンのばか』
太宰治 『走れメロス』
ワイルド 『幸福な王子』
デュマ・フィス 『椿姫』
夏目漱石 『夢十夜』
坂口安吾 『風と光と二十の私と』
辺見庸 『もの食う人びと』
ヘレンケラー 『私の生涯』
下村湖人 『論語物語』
ヘッセ 『デミアン』
志賀直哉 「清兵衛と瓢箪」
サリンジャー 『ライ麦畑でつかまえて』
島崎藤村 『破戒』
寺山修司 『家出のすすめ』
竹内敏晴 『ことばがひらかれる時』
シェイクスピア 『マクベス』
幸田文 『父・こんなこと』
宮本輝 『泥の河』
井上靖 『天平の薨』
林尹夫 『わがいのち月明に燃ゆ』
藤原正彦 『若き数学者のアメリカ』
サン＝テグジュペリ 『人間の土地』
ドストエフスキー 『罪と罰』
福沢諭吉 『福翁自伝』
エッカーマン 『ゲーテとの対話』